
こいつに友達がいないのはもったいない

一徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こいつに友達がいないのはもったいない

【Nコード】

N7699U

【作者名】

一徒

【あらすじ】

もう一度懲りずにやってみよう。

『僕は友達が少ない』アニメ化の前にやってしまった投稿。
肉（柏崎星奈）を恋人にしたいとい目的だけでやったのでノーブラ
ンです。

よろしくお願いします。

小さい頃の約束

白い髪をしてか、冷めた性分からか、小さい頃は友達と呼べる人はいなかった。

家に帰っても家族は滅多に帰らずいつも一人

学校でも「氷のようだ」と言われいつも一人

誰が何を言っても訴えず、主張しない。イジメの対象になるのは早かった。

校舎裏でテレビでやるようなヒーローの必殺技を真似るクラスメイト。

くだらない、ああくだらない。

殴り返して殴り続けて、先生が来る頃は自分以外誰も動かなかった。

余計に理解されなくなり一人でいる事が増えた。

苦痛は無かった。ただめんどくさくて、誰かといるのが嫌だった。

そんな気持ちを見捨てて女の子が近寄ってきた。

金色の髪をした妖精みたいな綺麗な女の子。ただし性格が残念で女の子といえるのを見たことがない。

ただ、いつもクラスどころか男は皆こいつの傍にいた。そんな女の

子が俺の前にたってこう言った。

「—————」

思い出せない。違う、真剣に聞いてなかったから覚えてない。だから空を見ながら適当な事を言っただけだ。

「大人になって、一緒に結婚したらね」

大人になる頃なんてずっと先。だから適当……の、筈だったのに。

「わかったわ」

顔を真っ赤にして女の子は答えた。

「大人になってホントに結婚したら、約束を守って」

この日二人は

いつかお互いが、大切な、大事な存在になる事を二人は知らずにずっと続く未来の約束をした。

「なんて言うかあほー！！！」

真っ赤に照れた少女は平手打ちを少年にかまし、脱兎の如く教室から飛び出した。

ずっと続く未来の約束をした

……等。

第零話 基本原作に沿う（オリジナルをやる技術は無いし）（前書き）

これ書くの忘れてました。

第零話 基本原作に沿う（オリジナルをやる技術は無いし）

小鷹は言った『これは幻覚だ』ってな・・・

綺麗な海、トロピカル、フラダンス、ヤシの実・・・誰もがイメージする常夏を代表するものをかき集めたような南の島に俺達はそこにいる。

そんな楽園を『隣人部』は満喫していた。

ビーチチェアに座っているのは見た目がヤンキー（くすんだ金髪が自毛とか泣ける）だが隣人部では唯一と言っていい一般的な常識を持つ男。

『羽瀬川小鷹』
はせがわ こたか

彼の視線の先には二人の小さな少女が仲良く砂のお城を作っている。

一人は羽瀬川小鷹の妹で外人の血が多く混じったようで小鷹とは似ても似つかない金髪美少女。

『羽瀬川小鳩』
はせがわ こはる

彼女より少し小さい銀髪でブルーの瞳をした十歳くらいの幼女。しかしれっきとした聖クロニカ学園に勤務するシスターで『隣人部』

顧問

『高山マリア』
たかやま

予め言っておくが、羽瀬川小鷹はロリコンでは無い。
近親〇〇の歪んだ恋愛事情も彼には無い。

あれだよ？小さい子を見て卑しむ・・・じゃない、癒されるんだよ？
・・・多分な。

気を取り直して周囲を見回すとパレオの付いた可愛いセパレート水着を来た華奢な人間が小鷹にトロピカルジュースを渡していた。

『楠幸村』

華奢な姿で綺麗な容姿。・・・だが男だ！
コスプレが似合い、羽瀬川小鷹を敬愛する存在。・・・
・だが男だ！

Dメールを送らない限り彼は彼女にはならない。

そしてその隣のチェアに座ってBL同人誌を読むポニーテールでワンピースの水着と白衣を着る少女

『志熊理科』

まともな人間の姿をしているが狂気のマッドサイエンティスト・・・
って訳じゃない。

・・・作るのがたまにヤバいだけ。

「あゝ、楽しかった」

「気持ち」

海から上がってきた二人の少女がこちらにやって来る。

鋭い目つきの黒髪少女

『三日月夜空』
みかづきよぞら

セクシーとか萌えから掛け離れた白と黒の縞模様のフルボデイの水着。夜空は小鷹の元へ行き、彼のジュースを飲む。小鷹が「返せ」と言っつて夜空と触れ合うが、完全にじゃれてる感じで甘々とした空気が二人の回りを覆う。

「何処見てんのよ」

派手なビキニ姿で金髪碧眼のスタイル抜群の美少女

『柏崎星奈』
かしわざきせな

チエアに横になる俺の首に抱き着いて耳元で囁く。

「夜空じゃなくて『恋人』の私をみなさいよ」

豊満な胸を俺の胸板に擦り合わせて、内股で片足の太股を挟む、俺も星奈の腰に手を回し、どちらともなくお互いに深いキスをする。

夜空が小鷹にキスをせがむのも幼女とシスターが互いに「こどもにはまだ早い」と目を隠しあってじゃれる姿も全く気にならない。仲間がいて、恋人がいる現実が充実した『リア充』そのもの。

だが、ただの夢だ。さて、起こしてやるうか。

ガンッ！！

「うおっ！？」

椅子を蹴り、朦朧としていた意識が戻ったのか小鷹は椅子から転げ落ちた。断じて椅子を蹴ったら威力が強すぎて椅子ごと吹き飛んだんじゃない。

「一人でトリップすんなよ？小鷹クウン」

人の不幸って何故こんなにも楽しいんだろう。俺はにこやかな笑顔で死屍累々の部員を見つめている。

「……楽しい幻覚を見ていた……」

「どんな幻覚だったんですか？」

どこか狂気を孕んだ引きつった笑顔の志熊理科は聞き返す。

「黒髪（夜空）と星奈が仲良く笑顔で戯れる夢だよな」

「………なんで知ってたんだ？」

「覗いたから」

「どつやって!?!」

「相変わらず魑魅魍魎も真っ青な人ですね、非科学的過ぎますよ…」

「人類とは科学では説明しきれないもんだぜ 君」

「志熊です。いい加減名前で読んでくださいよ先輩」

「まあ、二人が仲良く笑顔でっつのは無いな、現に今だっつて」

「そろそろ辛くなってきたのではないか? 降参した方が身のためだぞ肉……」

血走る瞳の三日月夜空

「ふふふ……そっちこそギブアップしたら? 息が上がってるわよ?」

同じく血走る瞳の柏崎星奈

で、二人して目の前の鍋に箸を突っ込んで真っ黒い『何か』を口に含む。

「うぐ……っ」

「ぐえ……っ」

二人して酷い声だな。

「が、があっ、あぐあっ、辛っ、うがあっ!」

苦悶の表情で喉を掻きむしる夜空

「うっ……うっうっ……甘い……よっな、違っよっな……口の中がねばねばして……喉が腐っっていく感じ……キモチ、ワルイ……」

白目を剥いて星奈がダラダラと滝のような涙を流す。

……とりあえず汚ねえ。

「なんでこうなっただっけ?」

俺は現状の説明を小鷹に求める。

「えっと、鍋……の筈だ……」

地獄絵図じゃねえか。

左には銀髪シスター（マリア）と金髪ゴスロリ（小鳩）が折り重なって悪夢にうなされている。

黒髪（夜空）と星奈に挟まれてんのは天然（幸村）

。箸は動いているが何も掴まず目が死んでる。

「幸村……お前まで逝っただか……」

沈痛な面持ちの小鷹に悪魔がやってくる。

「「貴様の番だ」」

黒髪と星奈に引き込まれ、泣きそうな顔で鍋に向かう小鷹。ああ、俺を見るな助ける気なんか無い。

俺は満面の笑顔で手を振った。

こいらはやっているのはようは『闇鍋』だ。星奈がギャゲーで友達同士で鍋パーティーをやる場面を見て「一緒に鍋を食べるといのはいかにも仲のいい友達という感じでいいな」といった。そしてそれに二人も同意。

そこから鍋をやるときの予行練習を部室でやることになったらしい。

で、小鷹はなんか勘違いして黒いスープを作り各自が一齐に食材を鍋にぶち込み闇鍋スタート。

そして現在。

俺が星奈にメールで呼ばれるとこの惨状だ。

黒髪と星奈は責任転嫁しながら喧嘩を始め、いつの間にか『最後まで生き残った奴が優勝』とか言うルールが追加されたらしい。

状況を振り返っていると、が逝った。最後の一言は『消毒用エタノール』ってなんのことだよ。

「す、すまん」

俺は換気して雑巾を取りに行った。

雑巾を小鷹に渡し、金銀と後輩二人を空気のまともなところに置いて、
んで俺は何も食ってないのに廊下でぶっ倒れた。

……… 空気が限界 DEATH 。

聖クロニカ学園敷地内の礼拝堂チャペルにある一室『談話室4』。
ここが彼等『隣人部』の部室だ。

活動はイロイロ、各々好き勝手に時間を潰したり、雑談やゲームを
やったり作ったり、小説を書いたり漫画を書いたり、楽器、芝居、
漫才の練習や知らない人への声をかける練習など……

活動内容から何するのか全く理解できない部活だか、ようは『友達
作り』らしい。

ん？何故こんなにも他人事のように話すのか？
まあ、性分でもあるんだが……… 重要なのは………

.....俺入部してないんだよね、だから闇鍋食わなかったし。

これは俺、『真白縁』ましろえんじの隣入部観察のお話

P.S.

入部してないけど星奈がスゲー噛み付いて一応『仮入部』扱い。

ちなみに柏崎星奈が幼なじみで小さい頃からずっと一緒。
ただし小鷹の幻覚ような恋人関係では無い。
ただし星奈本人が俺をどうみてるか不明。

第零話 基本原作に沿う（オリジナルをやる技術は無いし）（後書き）

感想まっています。

第一話 放課後 キャラ崩壊はデフォです(前書き)

更新を忘れていたのではなく、ISの更新が難しかった事を信じて
ください

第一話 放課後 キャラ崩壊はデフォです

放課後、屋上で寝てたらどうも星奈からメールと電話が大量にきた。

「うるさいだろうなあ・・・」

無視したいけどメールが段々と泣きそうになってて直接会わないと不味い気がしてきた。仕方なく俺は星奈がいそうな場所へと進んでいく。その途中で二年五組の前を通ると笑い声が聞こえた。

「ははは、本当にあつたんだってー」

「ええー、違うよー、やだなー」

「そんなこと言ったら私が好きになっちゃっぞー」

誰かが話してる・・・『一人』で

携帯とかだと思ったが、少し気になったので相手に気がつかれないように教室を覗いてみた。

教室には藍色がかつた黒髪でロングヘアー
うちの幼なじみに比べてかなり細身のスタイル（平均的なんだろう
がアイツのを見てるから全部ちっちゃく見える不思議）

多分顔は美少女。名前は・・・知らない。まあ、二年五組の生徒だ
ろう。

「あはは、そんな事言っただって騙されないぞー」

とりあえず携帯で話してる様子はない。

・・・誰と話してんの！？

一人で教室に残って会話とか怪しいよ黒髪さん！

まさか幽霊的な者か！？同じ学校にそんなハイスペックな美少女が
いたとは！うわああああ！！えらいもんに遭遇したー！！

「トモちゃんったらー、冗談ばかりー」

トモちゃん！？まさか10年前に教師と恋愛関係になったが親が認めてくれず教師と一緒に蒸発したという悲劇の少女『朝長美咲』さんか？！

二人とも生きてます。二人でオーストラリアで幸せな生活をしていますよ。

「遊園地は楽しかったよな」

遊園地！？同級生氣取りか！？ いや、それとも開校初期に男子生徒と清い交際していたが体育教師のNTRで牝奴隷へと変えられてしまった。『涼宮智子』さんなのか！？

全くのでたらめで交際もNTRなんてものもありません。むしろ噂が流れた初期の体育教師は被害者です。

あああああ！！えっっらいもん見ちまったあああ！！

ヤバイヤバイヤバイどうすんの？どうすんの俺！どうなっちゃっの！？

いや待て！まだ黒髪さんは気がついていない筈・・・ならやる事はただ一つ！

俺は教室とは反対の方向へ全力で逃げ出した。走る途中、教室へ向かう金髪のヤンキーみたいのがいた気がしたが俺は彼を無視して外へと飛び出した。

学園の入り口付近でメールを打ちながら歩く少女。金髪碧眼で整った顔立ち、そしてどこか気品のある少女。細身なのに胸が大きいというグラビアアイドル並みのスタイルを持ち、顔好しスタイル好しで部活中の男子生徒の視線を一点に集めていた。

一応、この作品（二次）のヒロイン扱いをされる柏崎星奈^{かしわきほしな}である

「まったく信じられないあの馬鹿・・・」

不機嫌な顔でため息を吐く柏崎星奈は文句を言いながら一人校門を歩く。男子の取り巻きを散らせていつものように幼馴染と帰る筈だったのに、その幼馴染と連絡がつかない。

「携帯つてのは電話でなきゃ意味ないつつつのばあーか」

一人で悪態をつきながらもひたすら電話とメールを幼馴染に繰り返す。

留守電1回目 「もう、何度目だと思ってるのよこのバカ！早く電

話よこしなさい」

メール1回目 『アタシを探して合流しなさい』

留守電7回目 「聞いている？メールでも電話でもいいから連絡ちよ
うだい？・・・待ってるからね？」

メール7回目 『今ドコ？メールか電話で連絡ちようだい。近くで
合流しましょ』

留守番16回目 「留守電もメールも聞いているわよね？届いているわ
よね？・・・お願いだから返事してよ・・・待ってるからね？」
メール16回目 『忙しかったらごめんね？メール見てくれてるわ
よね？返事ちようだい？』

思い出すと急につつむいて泣きそうになる。

「返事くらいよこしなさいよお」

ここまで無視されるといつもの事ながら凹んでくる。携帯を持たせ
ても全く使う気のないあいつにはいつも苦勞させられる。一人で帰
るしかないのかと半ば諦めてトボトボと歩いていると後ろから聞き
なれた声がした。

「星奈ー！ー！」

一瞬で顔がにやけるのが自分で分かる。だけど散々待たされた怒り
もあるので下手はできない。とりあえず文句を言ってやるうとにや

ける顔を我慢して振り返った。

「おそいわよおお何何何!？」

一瞬で腕を引つ張られ二人は校門を一気に駆けていった。

「何!なんなのよ!？」

「ごめん連絡寝てて気がつかなかった。駅前でパフェ買ってあげっからとりあえず学校出よう!」

「説明になってないわよばかあ!って速い速い速い!」

「とりあえず学校出よう」

そうして二人は学校を出た。駅前でパフェを星奈に奢りながらさっきの話をするとうれい笑われた。・・・

帰りに星奈を家まで送り、星奈の父に「泊まっていきなさい」と満面の笑みで引き止められるのを全力で拒否しながら帰る途中に気がついた。最初のメールはHRが終わってすぐに来ていた。でも俺が気がついたのは二時間近く後、星奈はずっと待っていてくれた。

第一話 放課後 キャラ崩壊はデフォです（後書き）

星奈はこんなじゃないよ！
みたいな苦情募集中です。

感想とかも待ってます

第二話 部活？いや、この絵を見てその発想は無い（前書き）

基本この二人のやりとりがメインになりそうです。（未定）

第二話 部活？いや、この絵を見てその発想は無い

六月の暫くたった頃、いつもみたくクラスメート兼幼なじみの柏崎星奈と昼食をとっていると、急に星奈が妙な事を言い出した。

「部活に入るわよ」

皆大好き星奈ちゃんからの急な前フリ……なるほど、俺はこのボケにどうツツコミ返すか試されてるのか。

いいだろう、俺を計れるものなら計ってみろ！

「……あれ？はかれるって『計れる』『測れる』『謀れる』どれだっけ……？」

「は？知らないわよそんなの。何の話？」

「ですよー（笑）」

「で、部活に入るのをなんで俺に？」

「だから一緒に入るのよ部活に。私と同じ場所にいれるんだから光荣でしょ？感謝しなさい」

「答えになってないぞ」

ニッコリ笑う星奈の頭をアイアンクロー
（ちなみに握力は80
キロ）

「イダダダダダ（× ×）ストップストップ！話すから！話すから離して！」

「話すと離すって聞いてると同じに聞こえないかい？（ギリギリギリギリ）」

「聞こえるけど今はどうでもいいわ！ああ！！ミシミシ鳴りそう！」

そんな感じでギヤーギヤー騒ぎながら説明を聞く、なんでも『隣人部』とか言う部活に入るらしい。「別に一人で入れよ」って言ったら涙目になってヘッドロックかまшыてきやがった。

相変わらずコイツは初めての場所に一人で行くのを怖がる奴だな……
ん？でも気になる事もある

「なんで隣人部とか言う部活なん？お前性格は残念だけど他にも色

々と部活はあるだろ？」

「……………今の会話に性格は残念って入れる必要無いんじゃない？……………あ、ちょうどいいところにポスターあったわね。これ見なさい」

星奈が指した掲示板には確かに『隣人部』と書かれたポスターがある。どうやら部員募集らしいが……………

「……………」とにかく臨機応変に隣人とも善き関係を築くべくからだ（体）と心を健全に鍛えたびだち（旅立ち）のその日まで、共に想い募らせ励まし合い皆の信望を集める人間になるう』ねえ……………こんなもん掲げれば創部が通るなんてなあ」

「パパの学校って基本大らかだからだしね。頭にキリスト教の精神とかイエス様の教えとかそれっぽいのいれりゃ誤魔化せるわよ」

「学長の娘がスゲー事言ったな。教員のクリスチャンが聞いたら告訴状叩き付けられるぞお前」

「パパがクビにするんじゃない？」

どこの無法地帯だこの学園は

「で？隣人部の臨機応変がどうして入部になった訳？」

「はあ…まだ気が付かないの？ポスターをよく見なさいよ」

ポスターを……ああ、イラストの方が

「イラストって進○の巨○だろ？デカイ巨人が……そう！あれだ、手足の付いたのを残虐無慈悲に貪り喰うシーン」

「違うわよ！なんでそんなスプラッタなのよ！？どうみても富士山の頂上で友達同士がおにぎり食べてるだけじゃない！」

ええー、それこそないわー。

だってどうみても捕食者が餌を喰うシーンだろコレ？『部員募集中だよ』って脇に書いてるけど新しく入った奴がパシられるイメージしか湧かないし。

「それに私が言いたいのにはイラストじゃないわよ、見なさい、ここから斜めに読むのよ？」

星奈が指差すところから斜めに読むところ書いてあった。

『と』『も』『だ』『ち』『募』『集』

「どんだけ必死に友達集めるのこのポスター？」

「いいじゃない。普段から友達を求める人間だからこそ気づくメッセージ：これを見て私は確信したわ、この部活なら私は友達が作れる！」

「お前いつも囲まれてるじゃん」

うん、学校でコイツが一人とか見たことないわ。必ず男子が沢山いるし

「私が欲しいのは同性の友達だっていつも言ってるでしょ？」

「知ってますー。それで俺が何人も女子に声かけてんのに『縁は私だから気安く近付かないで』とか言ってお膳立て全部ブツ壊してんのお前だろーが」

「何人も声かけてアンタが軽い奴だと思われてるのが気に入らなかつたんだから仕方ないでしょー！」

開き直りやがったこいつ……全く、誰の為にやったのか知らないで……

「とにかく！アンタは私と一緒に部活に入るのよ、もう入部届け二人分出したし今更嫌とは言えないじゃない」

入部届けもう出したのか。しかも二人分って完全に事後承諾じゃないかよ畜生。

「なによ……一緒に部活が嫌だっていうの……」

どうやって切り返そうかと思っていたら星奈が震え出した。震えたっていつても足がプルプルしてるだけ……じゃない！？なんか今にも泣きそうな顔してるない！？

「おんなじ……ひっく……部活……でも、ぐすっ……いいじゃない……」

なんで泣いてんの！？ってああ……周りの目が段々と冷えていく……俺なんかした？むしろ被害者俺じゃ……おい、星奈ファンクラブの馬鹿共、武器を構えるな。

「わかった、わかったよ一緒に部活に入りゃいいのな？」

いつもこうゆうオチになる。最後には俺が折れなきゃならない。どうやら女子を泣かせた時点で古今東西男が悪いと決まっているみたいなんだ。この法則を作った奴をシバきたくなるな……

そんな俺の苛立ちを知ってか知らずか星奈は上目遣いで俺を見上げる。

「グズツ、一緒の部活に入ってくれる……って事でいいの？」

「いいよ、考えてみりゃ今更別々になるのが変な話だし、幾らでも一緒にいるよ！」

やけくそだね俺。やけくそで答えると星奈はすぐに泣き止んではにかむような笑顔をしている。

「幾らでも一緒に……か、ふふ」

「何？なんか言った？」

「別に、じゃあ今日の放課後に部室行くわよ」

「はいはい……」

とりあえず放課後に部室に行く事になった俺と星奈。

話がまとまった後でふと疑問に思った事がある。『隣人部』という部活を使ってまで友達を求める奴ら、そんな人間に男女で行ってどんな反応が返ってくるだろうか……？

間違いなく冷やかすと勘違いされるよな？しかも星奈は学長の娘で毎日男子の取り巻きだらけだ。もし女子がいて拒否されたらこいつかなり凹むんじゃないか？

教室に戻っていつもどおりに男子に囲まれる星奈、あいつは男子に幾ら囲まれようが気にしないが周りの女子はかなり疲れた顔をしている。まあ無理もないか、一年からずっと繰り返したもんな……とりあえず部活に行って、拒否られて一人なったらまた俺が周りに声をかければいいか。

性格は残念だがそれでも友達は作れる。『一緒にいてやる』って言ったんだ、一人にする気はない。そんな事を考えていると星奈と目があつた、なんだ？嬉しそうな目をして……？

まあ、考えても仕方ないか……とりあえず放課後、二人で隣人部とやらに行こう。

そうして俺は授業の準備（睡眠）をした。

第二話 部活？いや、この絵を見てその発想は無い（後書き）

感想お待ちしています。

第三話 隣人部……え？あの黒髪の女子はまさか……（前書き）

お久しぶりです

第三話 隣人部……え？あの黒髪の子はまさか……

放課後、俺と星奈は本当に『隣人部』の部室に来てしまった……。

「ホントに来ちゃったなあ……礼拝堂談話室4『隣人部』の部室に」

「なんで説明つばいのよ？」

「いや、来ちゃったからさ……結局何人かに聞いたが『イラストが怖い』とか『何やるのか解らなくて怖い』とかで皆全力で近寄るの拒否してたぞ？本当に入るのか？」

「未知の存在に挑戦しようという探究心が無い人間はこれだから」

やれやれといった具合に肩を落とす星奈、探究心どころか周りに友達がいらない奴が何言ってるの？とか言ってみたいけど止めよう。絶対泣くし

「まあ、あんたが聞いた人間はどうでもいいわ、きつとあのポスターに巧妙に隠されたメッセージを受け取った選ばれた人間がこの部屋にいる筈……そしてそこに颯爽と現れる私！入学、進級して一ヶ月たつても友達一人いない連中にとって神のオーダーメイドとも言える究極美の私が入部すれば連中は私と知り合えて幸せ、私は友達が出来て幸せ。……完璧ね！！」

………たまに本当に凄いなと思うよ……一ヶ月どころか下手したら幼稚園から友達作れなかった奴がどうしてこつも前向きになれるのかなあ……？

つーかいい加減自覚しようぜオーダーメイド。お前は「優秀で」と

か「男にモテて」とかで友達が出来ないんじゃない性格がアレだから人が寄り難いんだよ。

半ば呆れて外を見ていると同じ学年の女子が何人かで帰っている。放課後に皆で何処かに寄るんだろうか？

グラウンドではジャージで走り込んでいるのは部活友達どうしだろうか？笑いなから走っているし、先輩や後輩とも仲良く見える。

そんな姿が目に入ったのか、星奈が少し羨ましそうに外を眺める。

……こいつは何年一人だったろうか？周りに人がいても満たされない日々、『友達が欲しい』そんな当たり前の願いを何年求め、周りの日常をどれだけ憧れたんだろうか……

気がつくとも星奈の頭を撫でていた。星奈は普通に受け入れている。

……特に意味もなく撫でるから慣れてるんだろうな。

満足したのか一歩前にでて扉の前に立つ星奈、扉をノックする。

扉を開けて出てきたのは男女二人。

一人は不良かヤンキーみたいな男子生徒……「ワルぶった高校生が金髪に染めるの失敗した」みたいな髪をしていて目つきが悪い。

だが俺は知っている。

モッピーだって知ってるよ。こいつは不良じゃないって、転校生だって。

転校初日に遅刻して自己紹介で皆を恐怖に叩き落としたって知っているよ？

おかげで転校して一ヶ月ろくに会話もできなくて、会う人皆に謝ら

れたり避けられたりする奴だって。

……知っていても特にすることないけどな。クラス違ったし。

そして次、こっちは大問題だ……少し前に教室で『トモちゃん』とやらと会話していた不思議少女がいやがる。

星奈はそんな俺の気持ちも知らず靈感少女の黒髪に話しかける。

「隣人部ってというのはここね？入部したいんだけど」

「違う」

黒髪は即答すると同時にドアを閉めて鍵を掛けた。

「……………」

「一瞬で閉められたな」

「なんでよ！？私が入部しにきて何あの態度！？」

こーゆう台詞が友達出来ない原因ってなんで気がつかないかなあこいつは……

まあ、門前払いの理由は何となく理解出来る、

星奈は良い意味でも悪い意味で有名だ。特に悪い意味だと『学園理事長の一人娘でいつも男子にちやほやされているお嬢様気取りのいけ好かないやつ』……嫌な話だけどこれが柏崎星奈という生徒の評価になる。

もう一度挑戦してドンドンと扉を叩いて叫ぶ星奈。すると扉が開き、黒髪は煩わしそうな表情でハッキリと叫ぶ。

「リア充は死ね！」

また思いきり閉められたな。

むしろあの清々しいまでの否定は好感すら覚えるわ。ふと気がつく
と星奈がべそかいてシャツを引っ張っていた。

「なんであんな意地悪されなきゃならないのよお……グスツ……私
が…グスツ、入部してあげるって……言って」

星奈の頭を胸に抱く。まあショックなのは理解できるけど泣く程じ
やないだろうに……

「……星奈」

「ん？ふぁ（なに）よ」

「入れりゃいいの？」

「うん」

「わかった」

星奈の意志を確認して扉の前に立つ。

「ノックしてもすぐ閉められるわよ？」

「知ってる」

俺は足先に力を込める。踏み込みの力、足先から練り上げる力をそ

のまま右腕に込める。

「ちよ、それはストツ」

「疾ッ！！」

その右腕を扉に打ち込んで扉を吹き飛ばす。よし、これで閉められる事は無くなったな。室内の人間はびっくりしてるが大した問題にはならなそうだ。

「大問題よ馬鹿！」

頭を叩かれた。痛くないけど

とりあえず壊したドアを直しながら話を聞いている。

修理を手伝ってくれてる男子は『羽瀬川小鷹』

星奈の話相手の女子は『三日月夜空』

二人とも二年五組らしい。なんでも三日月夜空が……………めんどくさい、呼び方は『黒髪』でいいや
こないだ話していたのは『エア友達』というらしい。何でも友達がないのが嫌なのではなく『友達のいない寂しいやつ』と思われるのが嫌らしい。随分とややこしい基準だな……

まあエア友達はどうでもいい。ヤンキー見たいな容姿で寂しい青春もとい誤解されやすい青春を送っている小鷹もどうでもいい、問題

は奴だ。

「あたしってほら、完璧じゃない？」

「……………」

黒髪がイラツとしたのがわかった。多分小鷹も感じてる。

「頭脳明晰スポーツ万能、そして見た目通りの美少女。神がオーダーメイドとして造ったとしか思えない完璧な造形美じゃない？天の不平等を嘆く自由を与えるわ庶民ども」

「ふん、下品な乳牛のくせに」

「あら、貧乳が何か言ってるっしやるわね」

黒髪に殺意が宿る。

「……………私は別に小さくない」

「中途半端な大きさの胸なんて無いのと同じじゃない？ねえ縁」

胸を寄せて持ち上げながら俺を見る星奈を見て黒髪が呟く。

「ふん、リア充共め。毎日その白髪に揉ませていたわけか」

その一言に訳のわからない対抗心を燃やした星奈はこめかみをひくつかせる。

「……………自分で揉んだのよ」

「惨めだな乳牛。その体はその白髪を喜ばず効果がないようだな！」

「ええ、効果が無かったわ……毎日毎日縁を考えて揉み続けてきた努力が縁の前では無駄だったわ……」

急に凹みだした星奈に黒髪から笑みが消えた。つーか星奈は人の事を考えて何してんだコイツ

「よし、これで扉をはめて終わりだな」

「ん、ああ、おつかれさん」

扉の修理も終わったから俺も話に混ざるか……

第三話 隣人部……え？あの黒髪の女子はまさか……（後書き）

感想まっています。

第四話 入部……え？ダメ？じゃあ仮扱いでよろしく(前書き)

珍しい連日投稿

第四話 入部……え？ダメ？じゃあ仮扱いでよろしく

「……自分より胸の大きい女を全員殺せば相対的に私が巨乳になるな。私の崇高な計画の栄えある生け贄第一号になってもらおうか」

「やめる夜空落ち着け！」

なんか胸の話がヒートアップしてやがる。小……えーっと……金髪が止めなきゃホントにやりかねない殺意だ、部活作る辺り行動力あるから何やるかわからんなー黒髪は。

「……で、えーっと……友達が欲しいって話でいいんだよね？」

「ええ、私も縁も同じ理由よ」

「お前はいつも男に囲まれてるだろうが。いや、必ずそいつが傍にいるだろうが。しかも白髪の方は社交的な人間だろう」

「そついえば真白なんかはうちのクラスの女子も会いに行くな」

黒髪がジト目で言うと金髪も同意した。

「わかってないわね。あんなのはただの下僕。あたしが欲しいのは友達。特に同性の、例えば家庭科の調理実習や修学旅行のグループ分けの時に『好きな子同士班になって』って言われた時にすぐに一緒にになれるような友達よ」

「ほう、ならばその白髪は下僕か。気の毒にな白髪」

「違っわー！ー！」

からかう程度の嫌味なんだろうが星奈が凄い剣幕で噛みつく。

「縁は友達なんて言葉じゃ足りないわ！縁のことは私が一番よくわかってるし、私のことは縁が一番よくわかってくれる。」

「縁は一番大事な人というか……大切というか……あ、あ、あ、あ、あ、あ、愛し」

だんだんと真つ赤になって最後あたりがなんか聞き取りにくいな。

「はあ……、もういい。で、白髪は何故友達づくりなのだ？」

「ああ、縁は逆よ。こいつは友達を『つくりたい』わけじゃないしね」

「なんだそりゃ」

「今すぐ帰れ」

「聞きなさいって、こいつはほとんどが『同じ』なのよ。自分の叔父と私、それから私の家の人間はまだ区別がつくけど、それ以外は景色に写るビルや石ころとかと変わらないの。縁が人と一緒にいても、学食での食事、放課後の遊び、行事も休みも全部、どこにいても本気で人間と風景の区別がつかない人間なのよ」

「どこの人外だこいつは。西尾さんところの生徒会にでも行かしたらどうだ？」

「どこの世界に行きや良いのよ！？とにかく！そういう理由で友達とかの理屈が理解できてないから友達をつくってやりたいの」

何かと苦勞してんだな星奈は。というか仕方ないだろう。本当に理

解が出来ないのだから。でも人が建物かくらいの区別くらい解るぜ？……多分。

「えーつと真白の件は理解したけど、本人は入部する気あるのか？」

「ん、ああ、入部できるならな。星奈が『柏崎さん男子に人気あるから男子と組めば』とか『真白君と一緒にいれればいいでしょ』みたいな台詞は聞きたく無いし、修学旅行旅行を部屋まで二人きりにされて別の意味で盛り上がる周り（景色）も嫌だしな」

「私と一緒にってそんなに不満！？」

「……まあ度を越すのはよくないよな、優秀すぎたりモテすぎたりするのは疎まれるし、興味無さすぎるのもさ……」

「ふーん、あんたヤンキーのクセにわかってるじゃない。踏んであげるからつまずく跳あきなさい。それとも靴舐める？」

……馬鹿……また始まったな。

「なんで俺がお前に踏まれたり靴を舐めなきゃいけないんだ」

金髪がジト目で言うと星奈は不思議そうに首を傾げる。

「うちのクラスの男子はご褒美に踏んであげたり靴を舐めさせてあげるって言ったら何でも言うこと聞いてくれるわよ？……ま、まさか傲慢にもそれ以上を求めるわけ？さすがヤンキーね……。二、二、ソックスで縛ってなんであげないんだからね！変態！」

「うるさいよ」

星奈の頭を掴んでアイアンクロー。そして金髪に説明。

「悪い、でもこれで理解してくれたか？こいつに友達がないのは優秀とかモテるとかじゃない。性格がアレなんだ」

「ああ……さすが夜空の作ったポスターの真意を読み取っただけのことはある……」

「その発言は何故か私を侮辱するような意志が感じられるな」

「気のせいだ。あと真白？柏崎はそのままでもいいのか？」

金髪に言われてようやく気が付いた。星奈が俺に頭を掴まれていることを。手足がダラツとして力が入ってない……俺はそのまま手を離れた。

「……縁い」

涙目の星奈……あ、まずい、泣きそう。

星奈はソファアを虫みたくモゾモゾと動き、俺の膝に頭をのせる。よし、暫く撫でてれば機嫌が治るだろう。

「貴様らは何故違和感なくそこまで人前でイチャつけるのだ……」

黒髪がジト目でめっちゃ睨んでる……金髪まで引いた笑顔だ。

「恋人同士で入部するなら帰れ貴様ら」

「この状況みて何処が恋人に見えんのよバアアカ……にへへ」

「バカップル以外に見えるか!!」

撫でられて機嫌が直った星奈と黒髪。更に口論が続くかと思っただけ、そうはならなかった。

「と、とにかく良かったじゃないか二人とも。これでどっちも普段一緒に過ごす友達が出来るわけだろ？俺も真白っていう友達が出来るし」

「はあ？」

「何を言っているのだ？」

金髪の台詞に星奈が頭を上げて黒髪と一緒に怪訝な顔をしている。

「ああ、クラス違うから調理実習とか修学旅行で一緒に過ごすのは無理か」

「「そうじゃなくて」」

「どうして私がこんなのと友達にならないといけないのだ？」

「あたしこんなのと友達になりたくないんだけど」

二人して立ち上がり睨み合う。

「……どういう意味だ乳女」

「……そっちこそどういう意味よ吊り目」

「貴様も吊り目だろっ」

「あたしの吊り目は可愛いけどあなたの吊り目はキツネみたいなものよ」

「あー痛い痛い、自分で自分を可愛いとか」

「真実を躊躇う理由がどこにあるの？」

「え、死ねば」

「ハア？人として明らかに価値の劣るあなたの方が死ぬべきじゃない？」

「金髪、二人つて知り合いか？」

「いや、夜空は喋ったことないっていつてたけど……」

「こいつの性格が悪いのが悪いのよ。凡人はパーフェクトなあたしに跪くものなのに……ストップ縁！アイアンクローは止めて！」

「頭の悪い貴様らバカップルよりマシだ」

「ハア！なんで縁混ぜてんのよあんた！つか部活で男女二人きりつてそつちがバカップルでしょうが！」

星奈の台詞が意外といい一撃だったらしい、黒髪が一瞬赤くなる。

「ば、馬鹿め！私と小鷹はそんな関係じゃではないわ！」

「はん！不純異性交遊でパパに頼んで退学にするわよ」

「パパア？いい年してパパだのママだの言ってるで恥ずかしくないのか？いつまでも乳離れ出来ない甘えんぼちゃんには困ったものだな生きていて恥ずかしくないのか？」

「ファミリー家族を大切にするのは悪い話じゃないだろ？」

「ふん、彼女が馬鹿にされて我慢できなくなつたか？」

「別に。俺が聞きたいのはお前が家族ファミリーに甘えるのを恥ずかしいといつたのを聞き返したくてさ。お前の今の台詞は、どんなに望んでも家族が手に入らない奴全てを否定するんだよな？」

「違う、この乳女が家族を盾にしようとしたのが気に入らないだけだ」

「そうか」

納得しているのか納得していないのか全くわからないの瞳で夜空を見つめる縁。「景色と人の区別がつかない」といわれたその瞳が夜空だけを間違いない見つめていた。その瞳に夜空は背中に冷たい汗を流し、喧嘩をしていた星奈すら不安そうに縁の袖を掴んでいる。

「と、ところで！」

空気に耐え切れず小鷹が強引に話に割り込む。

「ふ、二人は本当に入部するのか？」

「は、入るわよ！二人分提出してるし！」

「お前も入るのか？」

表情を変えずに縁を見つめる夜空に星奈が前に出る。

「何、文句あるわけ？」

「ある。出てけ。あ、違った、死ね」

「だったらあんたが出て死になさいよ。縁に文句あんの」

「黙れ。この部は私達のだ。よって入部は私達が決める」

「待った夜空。それなら俺も場合によっては辞めるぞ」

「小鷹？」

少し驚いた表情で小鷹を見つめる夜空。

「当たり前だろ？そんな身勝手なら俺も辞めるよ。一人で気の済むまでやってくれ」

「違う、入部を認め無いとは言っていない。ただ縁の方が興味を本当に持っているかわからないだけだ」

少し考えた様子で星奈を見つめ、縁は夜空に返す。

「星奈は入れてくれ。俺は暫く仮入部でいい」

「……………希望は乳女だけだから妥当か……………。興味が無ければ辞めにかまわん」

「ああ」

「じ、じゃあ入部決まりね。そこのヤンキー」

「だからヤンキーじゃないって」

「私と縁はちゃんと名前で呼びなさい。特別に許可してあげるわ」

「縁の方はわかるけどなんで柏崎まで……」

「キツネ目だけ名前呼びとか私の優先順位が低いみたいじゃない。あと私だけ名前呼びが無いとか差別よ差別」

「わかったよ……星奈。それとよろしくな縁」

「よし。縁もそれでいいわよね」

「名前呼びは構わないけどさ、一つ聞いていいか？」

「何？」

不思議そうに首を傾げる縁に星奈は笑いかける。

「なんで俺は金髪と仲良くなるのが決定してんの？」

「「「え？」「」」

「名前で呼ぶのはわかった。でも別に部活以外で仲良くする必要なくね？」

「……小鷹……乳女も言っていたらう、アイツは区別がつかない人間だ」

「……悪気はないやつだから。普通に明日から話かけてくれるわよ……多分ね……」

心底「わからない」という表情の縁を見て、今日一番ダメージが大
きいのは小鷹だったのは言っまでもない。

第四話 入部……え？ダメ？じゃあ仮扱いでよろしく（後書き）

夜空も小鷹も悪くない（笑）

第五話 ゲーム【前編】休みにゲームだけとかどんだけ自堕落だよ（前書き）

まさかの連日投稿（笑）ISもこれくらい出来ればいいのにな……
…（泣）

第五話 ゲーム【前編】休みにゲームだけとかどんだけ自堕落だよ

「お疲れさまでした」

『お疲れー』

夜、俺はバイトが終わって帰宅する。明日から土日で学校は休み。しかもバイトも入ってない……先に言っておくが叔父の仕送りのおかげで生活に不自由はない。

バイトは趣味だ。……いや、働くのに責任は持つてるよ？派遣タイプで派遣先は病院の地下だったり港の倉庫だったり森の中だったりで色々な場所があって割りと楽しいバイトだ。

……仕事内容？契約書の都合で内容は口外出来ない……スマン。

家に帰ると電気がついていて、鍵も開いていた。

「おかえりー縁ー」

「……いらっしやい星奈……」

家には「くつろぎすぎじゃね？」とか文句言いたくなる状態の星奈がゴロゴロとしていた。部屋着代わりだろうか人のジャージの上だけ着ていやがる。……下？健康的な脚線美が伸びて薄ピンクの逆三角とぶるぶるとした桃がジャージからチラチラしてるとだけ言っておく。

まあ、それはともかく、たまに星奈はうちに来る。そんな時はとりあえず星奈の家に連絡をいれる。

「あ、柏崎さんちですか？真白ですけど……」（略）

「略）はい、星奈うちにいます。バッグ持って泊まる気みたいで……え？（略）」

「略）……いや、迎えに来て貰えれば……はい……はい……いや、結婚とかじゃなくて（略）」

「……わかりました。じゃあ明日そちらに送りますんで……はい……はい、失礼します（終）」

「パパには許可貰ってあるわよ？」

「……うん。『娘を頼む』と『お義父さんだろう？』ってのが何処まで本気かわからないから返事にいつも困るわ……」

「大丈夫よ、酔った勢いで話してるから」

「いや、叔父さんが……気にしないな。絶対お前のお父さんハイになるに決まってる……」

「ノリいいものねー。あ、コンビニで色々買ったから食べましょ」

「うん」

とりあえず星奈と食事をする事にした。

「で、何しに来たの？」

パスタを食べながら星奈に聞く。うん、やっぱりファミマ（ファマ）
タスティック・マーケットシェア）のパスタは美味しいね。

「ゲームをしに来たのよ」

「ゲーム？」

「そ、ゲーム」

もぐもぐもぐもぐ……「くくん。」

「……………星奈、そろそろ遅いから帰った方がいいんじゃないか？」

「え！？土日泊まる為の用意してるんだけど!？」

俺は頭痛のする頭を押さえて溜め息を零す。

「バカらしくなってんだよ。なんで今からゲーム？仕事上がりで疲れてんだけど……………」

「今日部活でゲームの話が出て一緒にやることになったのよ。とゆうかあんたも来なさいよ部活」

「……………バイトだったんだ」

ジト目の星奈をあしらって棚を漁る。つっても棚の中は目覚ましとかアクセ系の小物だけだな。……………あ、例外で携帯ゲーム機が……………

「それよ縁!」

俺が手に取ったゲーム機『PSP』プレイングステイツポータブル職場や学校で進められて買った商品。まあ暫くしたら冷めてホコリを被ってる程だ

「あるけどソフト一つしかないぞ?」『モン狩』しか

「最高よ縁!あ、あ、あ、愛し……………てる」

「赤くなる前に最後まで喋れ、聞き取りにくい」

「……………ごめんごめん。まあとりあえず、月曜日にこれをやるのよ部活で」

あれ?星奈の額に青筋が見える。

「隣人部で?夜空や小鷹と?」

なんでまたそんな事を……………おい、今度は星奈がなんでか涙を流してる

「あ、ごめん昨日一日かけてあの二人の名前を覚えさせたのが無駄にならなくて良かったなあって思って」

……………返す言葉もありません。結局昨日は何故か最終的に凹んだ小鷹女子二人が慰めてやってたからな!。あいつ何があっただらうか……………

いや、女子に優しくされた時点で過程はどつでもいいか。

「そついやお前それどうしたの?PSP持ってたっけ?」

涙を拭って平然とした声で答える

「今日貰ったのよ。適当な奴に欲しいって言ったらくれたわ」

当然のように言えるコイツに若干イラツとしたのでバックドロップ
鈍い音と共に星奈は落ちた。とりあえず片付けをして、星奈が沈ん
だうちに寝よう。ゲームを今からとか冗談じゃない。

俺は早々に片付けて寝た。……………星奈に毛布をかけて歯を磨いてや
つてからな。

土曜日……

「じゃ、始めるわよ縁」

「おう」

本当にゲームをやるはめになった。

ちなみに今日の星奈は俺の制服のワイシャツを着ています、俺のだ
から袖がぶかぶかでも前ボタンが三、四個開いてる。

……………自分の服着ろよ

「昨日縁が帰ってくるまで暫くやってたのよ。流行ってるだけあつ
て割りとよく出来てたわ。まあ、所詮はお子様の遊びだけどね」

「ふーん。ホストお前でいいだろ」

「え、うん……」

かまって貰えなくてつまんなそうだが知った事が、星奈はランク1で俺はランク5。ちなみに5が最高ランクな

ゲームを繋ぎスタート地点に二人で立つ。このゲームはキャラの性別から顔、体格、髪型、etc色々弄れる。まさに都合のいいキャラクターが出来上がるのだ。

「星奈……お前のキャラ……【縁】って……」

……俺じゃね？てつきり【星奈】って名前で全部自分にそっくりにすると思っただのに……

「そんなに俺がモンスターに吹っ飛ばされるの見たかったのか？」

「違うわよ！？てゆうかあんたの【AAAAA】って何！？どんだけ適当に名前つけたのよ……」

「気にすんな。名前なんて意味をもたんよ」

「~~~~っ、まあいいわ……さ、行くわよ!」

星奈の武装はまんま初心者で薄っぺらい。そして俺はやたらドス黒く、刺々しい攻撃的な鎧だ。

「仮面被っててやたら敵ついわね。武器は？」

「鈍器だ。ちなみにこの鎧は攻撃的な姿の癖に回避性能ばかり特化してるぞ」

「ふーん。あ、武器のハンマー見せなさいよ縁」

「ん？ああいよいよ、ほれ」

俺は自分の武器を構える。

【AAAAA】

武器：ハンマー 『村長』

皆大好き村の村長。彼がその身を削り命をかけて繰り出す一撃はどんな災厄も恐れることはない。

「……………縁？」

星奈が凄い妙な表情で俺を見てくる。なんだろう、前に回転寿司で自分の頼んだものがいつまでも来なかった時の星奈によく似ている。

「どうした？」

「聞いていいかしら……………」

ああそうか、まだやり始めて解らない事だらけだもんな。普通はそこから思考錯誤を繰り返していくんだが……………まあ、星奈はゲーム自体が初心者だし、多少は調べながらやってやるか。

隣人部でやるまでに星奈が自慢出来るくらいは進めてやらないとな。

「なんならパソコンでボスキャラとかマップ調べるか？」

「じゃなくて！！そうじゃなくて！なんで武器が村長！？その人あれよね？クエストをくれる村の村長さんよね！？」

星奈がちよつと涙目で訴えてくる。

「ああ、お前もよく知ってる村長さんだ」

「なんで武器扱いなのよ！？」

「俺も詳しくは知らないんだが製作者の趣味みたいなもんらしくてな、人道的な面で武器のデータを潰したらしい。だが製作者が隙を見て一部を修復し、全てのクエストをクリアしてスタッフロールを見て、全てのクエストを決まった装備、決まった時間内にクリアすると使えるようになるらしい」

「どんだけお年寄りを痛めつけてるのよ。モン狩にそんな裏話があるなんて知りたくなかったわ……」

星奈が顔を青くする

「でも製作者はおじいちゃん子で今でも孝行者らしいぜ？」

「ならこんなデータつくんなー！！」

星奈がゲームにツッコミを入れた。やだ、傍目から見ると痛い女の子にしか見えないじゃない。

「とりあえずモンスターが来たから行くぞー」

そういうと俺達の目の前にそこそこデカイ熊みたいなモンスターが

現れた。俺は村長を構えて戦闘態勢に入る。

「し、仕方ないわね……」

星奈も大剣を構えた。

「いくぞ」

俺は熊の攻撃をローリングで避けて真横に移動する。そのまま溜め攻撃に構えて村長が赤く光る。

【キタキタキタキタアアアア！！！！！】

「ちよつ、村長大丈夫なの！」

「大丈夫だ問題ない」

一瞬で最高潮まで溜まる村長のテンションを一気に熊へ叩き衝ける。

グッシヤアア！！

【グハアア！！】

「イヤアアアア！?!?!?」

村長が熊を叩くと同時にハンマーなどの打撃系からは出る筈のない血のエフェクトが出て村長の叫びが響いた。

ついでに星奈もビツクリしてゲームを落としてた。

「ちよつと村長大丈夫なの?!?!あきらかにおかしい音したわよ?!」

大丈夫だ、問題ない。
そして星奈がビククリしてるとこ悪いが熊は倒れる。流石裏設定武器、威力が半端じゃないな(笑)

「私初プレイがゲームにツッコミ入れて村長にビククリして本体落としただけなんだけど……」

「気にすんなよ、初めは皆こんなもんだって」

「気にするわよ。ねえ縁…もう一個データ作って一緒に進めましょ
うよ?」

ええー超めんどくさい……

「縁い……」

ああ…くつつくな……ワイシャツ脱げるぞ……あ!ゲームを捕ろうとするな、このデータ作るのにどれだけバイト先でやったと思ってるんだ。

「……グスツ…縁い、一緒に進めましょよお……」

とれないように離してると星奈が涙目になってきた。いい加減この打たれ弱いのかどうかしようぜ星奈。いや、すぐ涙目になるからって甘やかす俺が悪いのか、星奈が悪い訳じゃないな。よし、ここは星奈の為に無視だ無視

「……………(プイッ)」

「グスッ……………」

「……………(っーん)」

「……………(ふるふる)」

「……………(ピクピク)」

「……………(ぼろぼろ)」

「!?!?だあっ! わかったよ! 好きに設定していいから自分でキャラ作れ!」

無視して黙ってたならなーんか妙な擬音が聞こえてきて、仕方無しに振り向くと泣き出しやがった!

普通に考えて女の子泣かした時点で男の負けだよ畜生!!

「ふふっ、ありがと縁」

星奈は上機嫌でPSPを持ってキャラを新しく作り出す。

自分の定位置ですとでもいわんばかりに当たり前に当たり前前に人の膝に座る星奈。いや、正確には横向きで体をよっ掛けて体育座りをする……………

……………まあ、俺が別に苦しい訳じゃないから星奈がどんな態勢でもいいけどさ。

……………30分後、星奈が作ったキャラは女キャラで名前は【星奈】予想通り星奈まんまなキャラだ。

星奈が【縁】で俺が【星奈】夜空にどんだけ怒られるか今から若干気が思いな……………

とりあえず二人で土日を使って本当にゲーム三昧だった。
食事は結局全部俺が作って星奈は食べるだけ。
たまにレンタル行つてDVD借りたり、二人で床でゴロゴロしたり
してかなり墮落した休みだったな……

P . S .

家まで送ると星奈の父親にまた引き止められた。ワイン一杯飲んだ
だけで酔うのに酒を進めるのは如何なものだろうか？しかも俺未成
年の筈なのに

結局また酔つて『星奈を任せた』だの『娘をよろしく頼む』だの始
まって帰ると言うといい年した男が鼻水垂らして止めるんだ……
痛々しいから制服だけ持って来て結局日曜は星奈の家泊まる事にな
った。

月曜日

学校に行くとき夜空に部活の無断欠席で怒られた。今日は必ず来いと
行っていたから授業終わって覚えてたら行こう……

第五話 ゲーム【前編】休みにゲームだけとかどんだけ自堕落だよ（後書き）

せめて部活でゲームをやれよ。………という叫びが聞こえた気がする。

第六話 ゲーム【中編】キャラクター作成は自分の願望が出やすい（前書き）

仕事が前に立ちはだかる……

第六話 ゲーム【中編】キャラクター作成は自分の願望が出やすい

「リア充は死ねえ!!」

「うっさいキツ根暗！」

「黙れバカツプル！」

「神に逆らった事を後悔させてやるわ」

「うっさい肉!!」

PSPをプレイしながら罵り合う（見た目だけ）美少女二人、そんな二人を尻目に白金の俺達は地道にプレイをしていた。

「んでここから横に入るとショートカットになるわけよ。で、ショートカットの途中に採掘できるポイントがあるわけな」

「へえー……お、レア鉱石ゲット」

「まだまだレアじゃないって」

「うっさいな、俺にはレアなんだよ」

「あ、夜空がやられたな」

「星奈二回、夜空一回で合計で………18対16か………」

「大分慣れて差が縮まったな」

普通にゲームをするはずが何故か二人の一騎打ちになったモン狩…
…なんでこうなったのか？それをまず説明しなきゃいけない。

……………そうだろ？

月曜日。全員が部室にゲームを持ってやってきた。

「操作とかは予習してあるな？」

「ああ」

夜空の問いに小鷹が答える。

「休みの間二人でやったけどたいしたことないわね。所詮お子様のお遊びってとこね」

素直じゃないことを言いやがる……………

全員で星奈を無視して互いにPSPを起動させた。

「ちよっ！？せめて縁くらいは反応してよ！」

「……………ホスト誰にする？」

「ランク一番高い奴でいいんじゃないか？」

俺が言つと小鷹も夜空も「そうだな」と同意する。

「小鷹と縁のランクは？」

「俺はまだ1」

「俺は前からやってるから5だな」

「ふっ、私は3だ」

夜空が一人で得意そうに言った。しかし一人で3とか凄いなこいつ。普通それいくまでに飽きると思うんだが……

「ちよつと！私にも聞きなさいよ！」

星奈が夜空に言つと、これでもかと言つほどに面倒臭さそうな顔で仕方無しに聞きいていた。

「ちっ……ちっ牛のランクはなんだ……牛肉のA5とか言つなよ」

星奈の名前はいつの間にか牛女や乳女ですらない牛になり一人だけランクが牛肉になっていた。あだ名が既に悪口の類とか凄いな……

「ふん！そんな事を言つていられるのも今のうちよ！見なさい！私のランクを！」

そついつと掲げたPSPに写る星奈のランクは……

『5』

「5!?!」

「あたしにかかればこんなゲームなんてちよろいものよ。ゲームまで天才的だなんてあたしってどこまで完璧なのかしら」

そう言っつて自分の凄さを誇示した星奈になぜか虐めたい衝動が生まれ、俺は簡単にネタばらしをする。

「流石だな星奈。凄いぞ」

「ま、まあね……えへへ」

星奈の頭を撫でてPSPを持つ手を軽く握る。少し嬉しそうに体を預ける星奈からPSPを奪い夜空に投げる。

「あ！？ちよつ、縁！」

「よし、いいぞ縁。プレイ時間を見せてもらっぞ肉」

「あ、勝手に見んな！」

俺から離れようとする星奈の頭を撫でて少し悲しい声を出す。

「そっか……星奈は俺から離れちゃうんだな………」（笑）

「えっ！？そ、そそそんな訳ないじゃない！」

（笑）に気がつかず頬を染めて、恥ずかしそうにくつつく星奈の目のメイクを落とす。

「プレイ時間41時間だと！？しかもなんか知らないアイテムいっぱい持ってるし！装備も可愛いし！肉のくせに生意気だ！」

星奈のPSPを投げつける。

「何すんのお馬鹿あ！……あ！？縁私のメイク落としたでしょ！馬鹿！」

どうにかキャッチした星奈は液晶でようやく目元に気がついたらしい。

俺が寝てからもチマチマとプレイをしていたこのアホはパンダみたいなクマが出来ていた。

「見ての通りこいつはずっとこれをやってた訳だ。俺に（・・）泣き（・・）ついてな（・・）（・・）」

床に伏せる星奈を見つめて蔑むような瞳で見つめながら膝を組んで答える。

「あたしにいくかかれば、こんなあゲームなんてえ、ちよろい。ゲームまで天才的だなんて、あたしって完璧だモォー……ねえ……」

「いつあたしがそんな話し方をしたかしら!？」

「まあ、たかがゲームにここまでやる奴はいないがな」

「くっ……縁まで……とにかく！あたしがホストって事で文句ないわね！肩慣らしでランク3受けとくから準備しなさい！」

「ふん、たかがゲームに夢中になるお子様に合わせてやる」

ちくちくと嫌味を言いながら操作する夜空。すると会話に混ざれなかった小鷹が近寄って来る。

「もしかして休みの間ずっと付き合ってたのか？」

「『付き合わされた』だな」

「でも優しいな縁は。それに星奈もなんだかんだ言っても部活動に取り組んでくれるんだから微笑ましいよ。……………ぶっ続けは自重した方がいいと思うけど」

……………意外だ……………すごい意外だ。あの痛々しい行動を微笑ましいとかどんだけこいつは心が広いんだ？

……………まあ、星奈をちゃんと評価してくれてるのは感謝しておこう。

「……………そうだな」

俺は色々な意味を込めて同意した。

スタート地点に立つとそれぞれのキャラが立っていた。

「小鷹、それだけ正確なイメージが持てるんだから希望を捨てちゃダメだ。まずは顔の骨格から変えることを始めよう」

「初めから「無理だから諦めろ」って言われてる気がしてしょうがねえよ！いいだろゲームなんだから夢見たって！！」

「夢だと認めたな小鷹」

「名前の【ホーク】って鷹？少しは捻りなさいよ」

小鷹のキャラクターは金髪サラサラヘアに美青年な感じだった。

「そ、それなら夜空はどうなんだ！？なんだそのニコニコ顔！お前そんなふうになりたいのか！？【NIGHT】でニコニコとかギャップ酷すぎだろ！」

「なんだと！この黄土色ヤンキーの分際で私のキャラにケチつける
きか！」

「先に人のキャラにケチつけたのは夜空だろうが！？」

「お前のは現実と妄想が掛け離れ過ぎているんだよ！！」

「お前にだけは言われたくない！」

夜空は容姿は大体一緒なんだが表情だけは本人と別人でやたらとニコニコしていた。

「まあお互いに痛すぎるわよ。縁もそう思わない？」

げらげら笑ってる星奈を見ながら俺は少し考えた。この二人は何故か星奈を見ようとしな……

「まあ私のキャラが一番マシって事ね」

得意げに誇る星奈……おかしい、いつもなら絶対夜空が噛み付くのに……！？

「……言いたい事があるなら二人とも言っていいたぞ？」

俺は二人に発言を促した。星奈は気がつかずに笑う……

「縁、きつと私達ランク5に恐れをなしているのよ。ふふん、私達二人を崇めなさい雑種ども」

どこかの英雄王みたいな発言に夜空が返す。

「ああ、否定しない。恐れてはいるさ……」

「ああ、俺もだ……」

「ふん、でしょうね」

得意げに語る星奈をよそに夜空どころか小鷹すらヒクつく

「最初は何かの間違いかと思った……だが間違いじゃなかった！肉！！貴様のキャラの【縁】とは奴だよな！？貴様の隣にいる奴だよな！？いくら私でもそこまでやれば引くぞ！！」

ああ、やっぱりドン引きするよな。

「お、俺も無いと思う……縁？多分訴えたらお前勝てるぞ？どうする……」

「許せ縁、私はてつきりイチャイチャとしているウザったいバカッブルだとばかり思っていたが、お前は完全な被害者だったんだな……」

どうやら二人は本気で心配しているらしい……いや、好きにやらせた俺も悪いけどさ、二人とも星奈を重度のストーカー扱いは止めてやってくれ……

「なんでキャラを縁にただけでドン引きされてんのよあたし!? 縁だって【星奈】って名前にして私みたいなキャラ作ってくれたわよ!?!」

「貴様が強要したんだろうが!隣人部で人権についてディスカッションしてやるうか肉!?!」

「なんでよおー!?!?!?!」

さすがにキャラ作りはやり過ぎらしい。二人にそういうモラルがあったのがビックリしたが、一番ビックリしたのは開始して10分たつのにスタート地点から一步も動けない俺達自身にビックリした。

………わかってはいたが、このメンバーでゲームとか絶対に無理だな。

第六話 ゲーム【中編】キャラクター作成は自分の願望が出やすい（後書き）

次回……狩りが始まる……!!

第七話 ゲーム【後半】やっぱり無理だった（前書き）

ゲーム編その1終了

……そうだよ、俺もそれは反省してるよちくしょう。だが言い分もあるぞ

「仕方ないだろう、これが普通だと思っていたんだから」

「……………」

あ、黙った。

「よし次は私がホストだ」

「ああ、夜空は部長だから当然だよな」

二人してコミュニケーションをシャットダウンしやがった！いいのか！？隣人的にそれっていいのか！？

「肉、いつまでもやってないで入れ」

「ぐえっ!?!」

のの字を書く星奈の襟首を掴んで引っ張る夜空。星奈、その声は女の子としてどうよ……?そんな風に考えていると星奈は気を取り直してゲームを再起動する。

「くっ……私が普通よりズレてるのは認めるわ！けどこのキャラクターが強いのも事実！私の……いえ、私達の土日の努力に跪きなさい！」

……認めちゃったよズレてるって……あと土日の努力って俺巻き込まれただけだからな!?!

決して口に出せない愚痴を胸に俺は集会所へ集まった。さあ、狩りの時間だ……

「村長は変えてこい」

……村長が何をしたっていうんだ……俺は渋々武器を普通のに変えた。

そして冒頭に戻るわけだ。

きっかけは星奈が夜空を大剣で斬っただけ。……うん、初心者にはよくあるよくある。むしろ自分の攻撃が味方にも与えるという設定を作った製作者……オボエテロヨ

「さあ死ね！人を殺している時だけ生きていると実感出来る！！」

夜空が人としてアウトな事を言いながら星奈にボウガンを撃ち込む。

「……っーかニコニコ顔でボウガン撃つとか怖くね？」

「夜空だとあんまり違和感ないからなんとも言えないな……なんていうか……あの心底幸せそうな笑顔が人を撃つ喜びだと思うと……うん、ちょっといたたまれないな……」

小鷹と雑魚を倒しながらマップを進んでいく。会話の端々に哀愁が漂う……

「割り切れ小鷹。殺らなきゃ殺られるんだよ」

「倒すのはモンスターだろ……ああ、また画面の死角に罠を……」

夜空は徹底して人を倒す技術を駆使している。こいつにバトルロイヤルゲームのスマブレ（スマイルブレイカーズ）をやらしちゃダメだな。

「畜生風情が神に逆らった事を後悔しながら死になさい！」

星奈は星奈で随分とアンタッチャブルなセリフを言っていやがる……土日に必死に集めたレアアイテムを贅沢に使った圧倒的な物量による敵の駆逐……星奈、お前モンスター狩るときより動きがずっと良くなってるぞ。

そんな感じでプレイが続き、星奈は自分のレアアイテムを使い切るまで戦い、夜空は金が無くなるまで戦った。なんて泥沼みたいな戦場だろうか、どこの内戦だよ。

ちなみに小鷹はこいつらが戦っている間ずっと素材を集めて装備が大分変わった……よかったな小鷹。

「ふん、ゲームをやってみたがやはりダメだな。何故ゲームの中まで他人に気を使わねばならんだ」

「全くよ、ゲームくらい好きにやらせて欲しいわ」

「お前らがいつ他人に気を使ったよ」

「「あゝあゝ？」」

小鷹の小さなツツコミにすら反応する狩人。俺は確信したね、こいつらはハンターじゃない。『アラガミ』とか『使徒』の類だよ。

部室でのゲームは散々だったがゲーム自体は中々の面白さなので小鷹は暇な時にちよくちよくやってるらしい。俺？俺は星奈が飽きたらしいからまたやらなくなった。

何度か誘われたが基本持つてないのが普通だから忘れてる毎日。だんだんと凹む小鷹をどうにかすると部長命令があったので、仕方なく小鷹のクラスでモン狩をしている奴を見つけてやった。

勇気を出して一緒にプレイしに行き、休み時間と放課後にクラスメイトとモン狩をプレイ出来た小鷹を見て、まあ大丈夫だろうとバイトに行った。

………後日、『羽谷川小鷹が教室で白昼堂々とカツアゲをした』と噂が流れた。

一体どんな流れでそうなったか知らんが、流石に夜空も何も言えなかつたらしい。

「やっぱり携帯ゲームはリアルの人間とのコミュニケーションが必要だから上手くいかなかったのよ」

帰りに星奈の話を半分くらい聞きながら帰る。

適度に適度にある程度話に返事をすれば満足するので会話に付き合っている、ゲームシヨップの前で星奈が止まった。

「………何してんの」

見ると星奈の瞳は驚愕とか感動とかでキラキラしている。

「………これよ」

「………は？」

「そうよ！同性の友達を作るのになんで剣を振り回さなきゃならな

いのよ！そうよ、私に必要なのはこんなゲームなのよ！！」

星奈が興奮気味に語りながら指を指す商品を見て、俺は軽い目眩と頭痛がした。

「まあジャンルの縁には不必要かもね、私がいるし」

それは大した問題じゃないだろ……

「よし、まずはクラスの下僕から一式手に入れて部活で使うわよ」

ああ、もう手に負えないな、まあ星奈が何してようが手伝うけど。

どんなジャンルかはちよつと考えたくないから……いや、幼なじみがこのゲームをやるとかちよつと自分で割り切りたいから話したくない……グスン

第七話 ゲーム【後半】やっぱ無理だった（後書き）

次回もよろしくお願いします

第八話 別に甘やかしてないし俺だってキレます(前書き)

読んでくれている皆様お久しぶりです。

遅れてすいませんでしたー!!orz

第八話 別に甘やかしてないし俺だってキレます

放課後、星奈がまたクラスメイトからゲーム機を受け取っていた。

男子が土下座して星奈が受け取りながら男子の頭を踏み付ける光景
……………うん、見慣れた。

どうやら今日はこないだ見つけたゲームを実際に部活でやるらしい。

俺はバイトがあるから星奈が男子を踏んでる間に教室を出る。

下駄箱で夜空で出会った。

「今日は部活に不参加か」

「そ、バイト」

「なら肉はどうする」

「あいつは普通に部活行くよ?」

淡々と会話していると声がかげられた。部活参加の女子や男子が声をかけていく。俺も軽く挨拶をする。

「縁」

急に夜空が声をかけてきた

「何？」

「お前、今話した奴らに何人知り合いがいる？」

「よくわからない質問だな……まあ答えるか」

「一人もいないけど？夜空は知り合いいたの？」

「……いや、私もない。じゃあ私は部屋に行く、お前もなるべく顔を出せ。肉の世話はお前の仕事だ」

「ははっ、星奈は気難しいからな。でも悪い奴じゃないよ」

俺は軽く手を振りながらバイトへ向かった。

「一人もいない……か、その割にはあいつら親しそうだったぞ……」

真反対に歩いていたら夜空が言った言葉は聞こえていないし、その言葉がどんな意味かも俺は知らない。

夕方、バイトが終わった帰りに家の前で膝を丸めて座り込む星奈を見つけた。

「……………何してんの？」

「……………」

目元が真っ赤に泣き腫らしている星奈。

「もう一回だけ聞けど……何してんの？」

星奈は急にぼろぼろと泣き出した。

「うっ、うっ……うええ……」

「今日放課後に部室に行つてゲームをやつた……ああ、こないだパソコンで調べたやつね」

「うええええ、うっ、うっ、うっ……」

「部室で夜空と小鷹と一緒にゲームをプレイしたら……」

「ひっく……ひっく……ぐずっ」

「有紀子は私を信じてくれなかった……有紀子って誰だよ!？」

「うえええ……」

「『信じてたのに』……つてお前まさかゲームのキャラクターに言つてんの!？」

「有紀子は私の親友よー!！」

「戻つてこーい!お前ショックでゲームと現実の狭間に挟まつてるぞー!！」

感受性が高いというか……なんというか……

やっぱり基本アホだなコイツは、あと性格が残念だ。

のめりこみすぎだろ！？

とりあえず近所迷惑なので家に入れた。

「という訳で私と有紀子の学園生活を邪魔したあかりってビッチが元凶なのよ！！」

「主語話せや！学校で何やったのか肝心な所省き過ぎてて理解し辛いんだよ！！」

ただでさえゲームやった以外に情報ないつつうのに俺にこれ以上何をやれというんだ。

あ、ちなみにゲームの名前は『ときめいてメモリーデイズ7』大人気美少女恋愛シミュレーションゲーム『ときメモ』の最新作……らしい。………どういうゲーム？

女の子と仲良くなる事を目的としたゲームで『ギャルゲー』と呼ばれます。

「で、部活でこのゲームをやろうとしたのよ」

「知ってる、ゲームのセーブデータに名前残ってるし、つーか何『真白せもほやかたま』って……………嫌がらせ？」

「ち、違っわよ！これはあの馬鹿キツネが……………」

うるたえる星奈……………というか絶対これ『真白星奈』とか入れようと
してないか？

「と、とりあえずもう一度名前から始めるわ」

「いいよ面倒臭いから、このデータでやっちなえ」

また最初から始めようとする星奈を無視してストーリーを始める俺

「わかったわよ……………名前『星奈』にしようとしたのに……………」

少し頬を膨らませている星奈を横目にゲームを進める俺達、『真白
せもほやかたま』は自分をどこにでもいる『普通』と言い張り平凡
な人生と言い切る。するとチャライ感じの男が現れた。……………そして

「死ねやチャラ男オオオ！！」

瞬間、俺は躊躇わずテレビの中心……………そう、出てきたチャラ男の顔
面を踏み抜くように蹴りを放つ、おかげでテレビの中心は俺の足が
貫通している。

……俺ゲームに出るようなお助けキャラみたいなモブって嫌いなんだ。いや、お助けキャラや説明キャラは嫌いじゃ無いが……あれだ、街中でナンパしてる集団やチャラいの見つけると人間テトリスやりたくなるんだ。そんな俺に星奈はびっくりして反論する。

「何してんの！？何してくれてるの?! テレビが壊れ……てる……け……ど……なんで……?、なんで蹴った部分がガラス砕けずに熔けてるの……!?!」

星奈の言うとおり、テレビのガラス画面が貫通している。そして画面が蹴りの摩擦で焦げて蹴った周りのガラスが若干熔けていた。

「全力だったからな、やりすぎた。摩擦でこうなったんだろ」

俺は布を取り出してテレビに被せる。

「なあ、なんか杖っぽいのない?」

「……シャ、シャーペン……とか?」

「おう、んじゃあ1・2・3」

うるたえている星奈からシャーペンを受け取ってテレビを軽く叩く。
すると

何事もなかったかのようにテレビが元に戻った。

星奈にそれだけ言って俺はゲームを進めようとしたが、星奈に首を絞められた。

「なんでコイツなのよ！」

あ、下乳に挟まれて軟らかな感触が頭の上に……じゃなくて

「星奈よく考えるんだ、『将を射る為にはまず馬を射よ』まず外堀を埋める事が大切だ」

好きなキャラメインにするのが普通なんだからこのやり方は間違いだけだな。

「な、なるほど……さすが縁ね！馬鹿キツネや下っ端ヤンキーとは格が違うわ！」

……ああ、夜空と小鷹か。

別に好きなキツネを攻略させてやってもいいんだが、コイツは間違いない全キャラを攻略する。その確信が持てる。

何故なら……

「ひつく……ぐずつ……あかり……なんで貴女はそんなに優しくなれるのよ……」

あかり

【私も……よくわからないや……けど、きっとせもほやかたま君のおかげよ？私、貴女がいてくれるから優しくいられる。……貴方が……大好きな貴方が誰よりも優しいから！】

「あかりー！！！」

単純なんだもんコイツ……

さっきまで治安国家に住む住人とは思えない発言をしながら進めていたのに今ではゾツコンの星奈、コイツは本当に単純だからいくらでもめり込む。

そしてしばらくしてから星奈は藤林あかりをHAPPY ENDで終えた。今は別のキャラをやっている。

俺も暫くは見ていたが諦めて寝た。

後日、廊下でギャルゲーを持っている小鷹に会った。廊下でギャルゲーをもつヤンキー面ってなんかシニールだね。

「あ、縁」

「やつれてるなあ小鷹、星奈に押し付けられたか？」

「ああ……お前は？」

「俺はいつものように付き合ったよ」

「最後まで付き合えるお前が凄いや……とりあえず俺も一回やってみるわ」

あまり気乗りしないようだが帰っていく小鷹、また聞いてみるとどうやらチャラ男でBAD ENDをしたらしいがあいつは「親友との変わらない友情を誓うエンディングなんて最高じゃないか！」とか力説したから俺は返ってきたゲームを叩き割って終わった。

第八話 別に甘やかしてないし俺だってキレます(後書き)

次はいつになるかなあ……

アニメを楽しみながらやりたいです

第九話 話が進まない？違うな、進めるのが面倒臭いんだ（前書き）

仕事していると一日って凄い早いですよね（笑）

第九話 話が進まない？違うな、進めるのが面倒臭いんだ

「なんか最近、誰かに見られてる気がするんだよな……」

『ふん、外面がいいだけのビッチには用はないのよ。てめーはそのへんの頭悪いチャラ男とでも乳繰りあつてるバアアアカ！』

『ときメモ』は全ての国民がプレイすべき作品だわ！これはただのゲームなんかじゃなくて……言うなればそう……人生、かしらね……』

「まあ……こういう具合に貴様がいない場所でこの肉は残念な感性を遺憾なく発揮しているわけだ。見るこの完全に相手を蔑む瞳を、そしてゲームで人生を捨てた双眸を」

夜空が聞かせてくれた声は星奈によく似ていた。しかしゲームに人生を投げ打つとは随分と潔い生き方じゃないか。

「何であんた録音してんのよ！消しなさいよ！ていうか消して！……縁！せめて聞いて！聞いて欲しくないけどこつも興味なさ気だとあたしも立つ背が無いから！」

訂正、どうやら星奈だったらしい『ときメモ』を人生と語るとは星奈、お前にとって学園生活はどれだけ重いんですか？

「何をいつているのだ肉、貴様に立つものがあつたのか？」

「何で曝しものにされた上にこき下ろされてるの私！？」

星奈だからさ……何だこの赤い誰かを彷彿とさせる台詞は……!?!
星奈だからさ……」 一体何処を変えれば俺は……俺は……!

……まあどうでもいいか。

『なんで!?!なんでテレビが戻ってるの!?!なんで何事もない顔してるの!?!てゆうかまずテレビ画面が摩擦で熔ける蹴りって一体何!?!なんで一瞬でテレビ戻せたの!?!』

「はい、じゃあ上のを参考にしてくれ、この一文だけで『なんで』と言う台詞を星奈は4回も言っている、これは聞く側としてもよろしくない、シンプルなツッコミならともかく『なんで』と繰り返す事で逆に他の奴がツッコミづらい場面を作ってしまったている訳だ」

「肉め、貴様そこまでして目立ちたいか……」

「これこの間のあたしの会話じゃないのよ!?!どう見ても私けなされてるだけじゃない!?!」

とりあえず俺も試しに星奈にダメ出しやっぱり友達作りなら会話の仕方を見直すのも重用なものな。

「星奈の場合はこれを無意識にやっちゃってしまっているから問題なんだ、これを具体的に1から10の項目に分けて『なんで』という単語を星奈が使う状況から逆説で説明していくとだな」

「縁……!?!私が悪いの!?!私が悪いのこの状況!?!私が悪いなら謝るからやめてえ……!?!」

更に続く考察を涙目で抗議する星奈。

「まず人の話を聞いてくれえ!!」

だがそこに切り裂くような叫びと共に小鷹が会話を遮った。人の話を聞けって言われてもいつ話したよ小鷹くん……？

「出だしから！初っ端から！一番最初から俺話したよな！？何で誰も聞いてくれなかつたんだよ！」

「自惚れるんじゃないわよ小鷹、被害妄想なら隣の懺悔室行ってきなさい」

「どんだけ辛辣な判断下されてるんだよ俺！」

「はいここ注目ー、『なんで』と繰り返す事なく『どんだけ』と一言で切り捨てたー！」

「まあ、待て縁、話を聞いてやるっ」

夜空が優しく小鷹の主張を聞こうとしている。

「夜空……!!」

だが小鷹は涙目になっている。それは何故か？……簡単だ、夜空が俺達以上になにか可哀相なものでも見るような慈しみに満ちた眼差しを向けているからだ。これはキツイ

「ほ、本当なんだ夜空」

「ああ、『誰かに見られている気がする』のдарうつ？」

「全然信じてないじゃねーか！『気がする』を主張しないでくれ！」

「とにかく、トイレとか食事とか廊下を歩いている時に妙な視線を感じているんだ」

「具体的には観察してる感じの視線だよな。冷えていて小鷹君が目を向けると消えるのに目を逸らすと視線が戻る感じ」

小鷹君の説明に補足を付け足すと三人が妙な視線を送ってきた。

「何で知ってたんだ……？まさかお前が……！」

「アホか小鷹、お前を観察するメリットがないだろうが」

「学園に珍しい唯一のヤンキーってくらいなものね」

「ヤンキーじゃねえし！で、縁は何で知ってるんだ？」

「簡単だ、小鷹君をつけている奴を見つけて興味本位で俺がそいつを尾行した」

「普通に助けてくれよ！？」

「よく考える小鷹君、そんな馬鹿正直にやって楽しいか？マガジソでヤンキー漫画読んでる奴が急に魔法先生読むようなものだぞ？」

「例え方かわからないんだが……」

「まあようは面倒臭いから暫く何してるか見てただけ」

「最低だな！」

小鷹君がいいように弄ばれているのを知って反論するが星奈はそれを許さなかった。

「何縁バカにしてんのよバアアアカ！気が付かないあんたが悪いんでしょうが！」

「こ、こつちだって色々と考えたんだよ！不良に目え付けられたとか風紀委員とか！」

小鷹君の必死の訴えも虚しく星奈はかなり際どい目つきで睨み返す。だがそれもつかの間、すぐにまたアレな表情で爆笑しだした。

「あははははははははは！バツカじゃないの！？小鷹バツカじゃないの！？目立つ新参者をシメてやるうなんて飼い馴らされた家畜の集まりみたいなこの学校にいるわけじゃないじゃないバアアアアアアカ！風紀委員もいーりーまーせーんー！プライドも何にもないで大人の言うことを聞く天然記念物みたいな集まりだからいりませーん！ひやははははははははははははははははは！何で頭が逆さまにー！」

もう人としてアレな感じで星奈が爆笑していたのでそのまま縄で天井に吊す。つーか同じ学校の奴を家畜とかすげえ……

「笑いすぎて喉渴いたろ？ほら、水」

「あだだだだ！小学生の頃のプールみたいな感じがする！鼻の中に水入ってなんかきちゃう？！なんかきちゃう！？」

逆さ吊りにした星奈の鼻の穴目掛けて水を注ぎ込んだせいで鼻水と水がコラボして随分と綺麗な顔が残念だがまあ問題ないだろう。

「まあとにかく原因は解ってるんだ、明日から暇なら……気が向いたら……いや、覚えていたら……多分手伝う……かな？」

「手伝う気がほぼゼロじゃねえか!！」

「まあ、落ち着け小鷹」

小鷹が発狂していると夜空がコーヒーを持って来た。なんかいつもの夜空じゃない感じの優しい空気で小鷹が更に泣きそうになっている。

「や、やめろよ……優しくするなよ……」

「気にするな、今は優しくする方がダメージがでかいだろう?」

知っていてやっているらしい。

「ああ!どいつもこいつも!！」

「ふ、自分より哀れな人間をみると人は優しくなれるというのは本当だな」

「お前は同情が時に露骨な悪意よりも人を傷つけるのを知っているから夕チが悪い!！」

「まあもしかしたらお前に好意を寄せている人間が草場の陰からこっそり見ているという可能性もあるからいつの間にかリア充デビューもあるかもなあ……」

そう言うのと僅かだが確かに夜空の纏う空気に変化が生じた。

「恥ずかしい話だし一番ありえないな、もういい、俺一人で何とかする」

「まあ待て小鷹」

膨れっ面で立ち上がる小鷹を無理矢理押さえ込んで座らせる。しかも動けないよう肩を組んで隣に座りだした。

「同じ部で共に歩む同志が悩んでいるのだ、部長として是非つ、つつつき合ってやろう」

若干赤くりながら答える夜空、しかも呂律が回っていない

「いいよ、俺一人でやる」

まだいじけてる小鷹はプイツとそっぽを向くが夜空はそれを強引に顔を合わせてしまう。

「休み時間は暇だな」

「結局暇つぶしじゃねえか！……ハア、まあ言った俺も悪いか……」

「そうゆう事だ、まあ諦める小鷹」

そうゆうと優雅に立ち上がり部室を後にする夜空

「ねえ縁……」

「ん？」

「今夜空の手と足が左右一緒に動いてたわよ」

「そうな」

間違ひなく緊張してただろうな。あと今頃一人で舞い上がってるだろう。多分叫んだり小躍りしたりするタイプじゃないから一人で屋上とかでにやけてるんだろうな……

「ところで縁」

「ん？」

「私はいつまでこの状態にいるわけ？」

「あ……」

見ると星奈は逆さ吊りの状態でスカートが逆さまでパンツ丸見え、しかしそんなことも気にならないくらい頭に血が昇ってグロッキーな星奈だった。

第九話 話が進まない？違うな、進めるのが面倒臭いんだ（後書き）

『作者が何をしたいかわからない！』

そんなふうに思っている方いませんか？

大丈夫、作者もわかっていませんから！（泣）

……………せめて定期的にあげれるようになりたいわ（泣）

第十話 原作の夜空カムバック（前書き）

タイトルは……原作のような彼女に戻りたいな……という願いです
（笑）

第十話 原作の夜空カムバック

夜空

「縁部員、肉……貴様ら今日がなんの日か忘れたか……？」

小鷹くんの悩み相談から一夜明けた朝、学園に登校していた俺と星奈は朝っぱらからとんでもないものを目にした。

星奈

「な、なんの日で言われても……」

星奈が言い返せない辺り異常事態だろう？だって目の前には

夜空

「肉う！！貴様昨日の事をもう忘れたか！どうせ貴様の頭は縁部員か縁部員の妄想以外ないのだろうが！昨日だったときメモのシーンを自分と縁部員に変えて妄想に浸り縁部員の使ったクッションを顔に埋めて涎を垂らしながら喜んでいただろうがこの淫乱肉！！」

星奈

「朝っぱらから校門で恥ずかしいからやめて!？」

朝っぱらからやたらハイテンションの夜空、どうやら昨日小鷹くんのリア充デビュー（予定）ってのが相当こたえたらしい。今、夜空は学園の制服に特攻服とチェーンを巻いた木刀とバンテージという殴り込みスタイルで校門の入口に仁王立ちしていた。『唯我独尊』『悪鬼羅刹』『南無阿弥陀仏』って……なんか微妙に違うし。

縁

「おはよう小鷹くん」

小鷹

「ああ……なんで夜空はこんな事に……」

縁

「部員の為に頑張ってくれる部長なんて部員としては喜ばしい限りだろ？と言っより説明したん？例の視線は学校始まってからだっ？」

夜空

「報告は小鷹から受けている！！」

夜空が食いついてきちゃった！？

夜空

「だが縁部員考えてみる！敵は小鷹に何を思っって近寄っって来るか現状がわからん！よっって我々はたとえ早朝であろうとも小鷹から目を離す訳にはいかんのだ！！」

……ようは自分が見えないとこで告白でもされてしまうのが嫌なのな……？

夜空

「む、授業まであまり時間がないか……縁部員、肉、事前の連絡をしなかつたのはこちらにも非があるが今回の活動は小鷹の今後の学園生活において非常に重要な案件だ！現時点を持つて一時解散とし次回集合はホームルーム終了後の 九：二（マル・キュウ：フタ・マル）とする！！小鷹、教室へ行くぞ！」

そういつて夜空は小鷹を引つ張り教室へ向かう。モーゼが如く他の生徒の群れを割る夜空はある意味目立ちすぎていた……。

星奈

「な、なんで夜空はあんなやる気なのよ……」

隣には部室での行為を曝されて赤面している星奈が半ベソかいて立っていた。

クツシヨンに顔埋めてるのはいつもながらだが俺が座った椅子に顔つけて悦になるって……いつか星奈の家族と話し合うべきかもしれない。

ホームルームが終わると星奈が来た、俺は日直だったらしいので同じ日直と職員室へ向かう。背が小さく小学生にも間違われそうな少女……名前は知らない、顔は見たが覚えてない。決壊として「見ず知らずの他人」だ。あつちには楽しそうに「キヨネンノハナシ」とか言うのをしているがなんの話だろうか？……星奈は一人で大丈夫かな？

夜空

「では現時刻をもって作戦を開始する！！敵性戦力は発見次第殲滅せよ！見敵&必殺サーチ・アンド・デス！！ゆくぞ見敵&必殺サーチ・アンド・デス！！」

星奈・小鷹

「待って！」

突っ走る夜空を二人して止めた。

小鷹

「夜空！一回冷静になれ！落ち着こう？な？」

夜空

「小鷹？貴様にはわからないのか！？この妙な視線を……！私は自分が情けない、貴様がこんなにも好奇の視線に曝されて孤独な学園生活を送っていたとは！だが大丈夫だ小鷹！お前は一人ではない、私がいつだって隣にしよう！！」

告白にも取れる熱いセリフに顔を赤くしながらも小鷹は言い返す。

小鷹

「気持ちはいけがたいけど落ち着け夜空、確かに視線は感じるぞ？でもこれは俺が言ってたやつじゃない……」

夜空

「！？まさか……敵の増援か！」

小鷹

「違う！普通の生徒からも注目されてるんだよ！主にお前の奇行で！」

夜空

「？」

不良ツラの小鷹くんが顔がいい黒髪の美少女と女王様扱いの変態……二人の美少女（笑）を連れてくる小鷹くんは無差別に注目の的に

なっていた。しかも星奈が『大事な用事があるからあんたたち虫けらども相手をしてあげてる暇はないの』とか言ってたから怨念めいた視線をあびながら休み時間を過ごしたらしい。ちなみに怨念めいた視線の主を敵と勘違いして夜空は狩っていた。俺はあの時初めてリアル『モン狩り』を見たよ、遠目からでよかった。

縁

「つーわけで彼は刺激的な毎日をハードボイルドに過ごしているわけだね」

????

「さすがです小鷹先輩」

小鷹

「いや、望んでやってる訳じゃないぞ!？」

午前中の話を聞かせながら俺は小鷹くんと一緒に彼と会話していた。

星奈

「縁……」

声をかけられて振り向けば顔面蒼白でぶるぶると震えていた星奈と「信じられないものをみた」という顔をした夜空がいた。

星奈

「縁……その子……誰？」

縁

「男子の制服着せて楽しんでるんだよ（嘘）」

星奈

「あ、あたしがいるじゃない！あたしが男子の制服着るわよ!？」

縁

「だって星奈は胸が大きいからブラがあってリアリティがないし（嘘）」

星奈

「ノーブラで一緒に歩くわよ！夏服で第二ボタンまで開けるし冬服なら素肌にブレザーでもいいから!」

小鷹

「なんの話をしているんだよお前らは」

星奈

「小鷹うるさいわよ！あたしの縁の隣というポジションが奪われそうなんだから邪魔しないで!？」

夜空

「肉、落ち着け。二人の性癖が予測不能でも私達が受け止めればいいだけだ。縁は貴様が、小鷹の性癖は私がフォローする」

縁

「あ、テンション戻ったんだ」

夜空

「……朝の事は忘れろ縁、さもなければ今ここで110番に私は電話

する」

やべえ目がマジだ

小鷹・縁

「忘れます」

夜空

「いいだろう。で、こいつは何なのだ？」

小鷹

「俺もそれを聞いているんだよ、なんか悩みが解決するから付き合えって言われてさ」

夜空

「なんの話だ……？肉、ブラを取るな戻せ」

星奈

「縁の隣のポジションに下着は邪魔なのよ……！」

女性としての羞恥心とかモラルは？

縁

「……………俺は今奥ゆかしい女性が好みだ」

そついうと星奈の動きが止まる。そして下着を付け直して服装を整え、物静かな雰囲気を出してきた。よし、これで暫く静かになる。

夜空

「で、こいつは結局なんなのだ？」

夜空がうんざりした顔で、小鷹くんは若干顔をしかめながら聞いてくる……俺は答えた。

縁

「んー、この子が今小鷹くんを付け回してる生徒。名前は楠幸村^{くすのきむら}。一年一組だ」

幸村

「楠幸村、一年一組です。皆様よろしくお願いいたします」

丁寧に頭を下げる。

「年下属性だったかぁー」と絶叫する星奈

「こ、こいつが犯人だと……」と推理ドラマ顔負けなリアクションの小鷹

だが一番リアクションが大きいのは……

夜空

「こ、こいつが犯人だと……か、可憐さ……純朴さ……純粹さ……お、女の子らしい……こいつが小鷹とリア充……ほ、ほうあぁあぁー！」

………夜空、パニックになりすぎだ。

第十話 原作の夜空カムバック（後書き）

さあ！今月からアニメですよ！！

仕事だからHDに録ろうWWW

第十一話 思った以上に進められなかった(前書き)

100件突破ありがとうございます。

アニメ効果って凄い(笑)

第十一話 思った以上に進められなかった

夜空

「戦争を始めよう」

小鷹

「始めないからな！？やめろよ絶対に！な、まず落ち着け？」

小鷹が宥めると夜空は目からハイライトが消えて幽鬼のような表情になり始める。

夜空

「大丈夫だ……自分でも不思議なくらい落ち着いている……」

小鷹

「そういう命のやりとりの落ち着きじゃないからな！？落ち着け夜空、な？一回座ろ？」

肩を押さえながら座るように促す小鷹から視線を外して夜空は照れた態度で手を払う。

夜空

「小鷹……優しさも私は敵対行為とみなすぞ……優しい手つきで押さえ込むなんて、お前ソファーで何をする気だ！？」

小鷹

「お前の妄想で俺は何をさせられるつもりだ！？」

縁

「ナニだなんて小鷹くんのえっちー」

幸村

「ひとめを気にせずおなごをてごめに……小鷹先輩、さすがです」

小鷹

「俺は無実だからな！」

はい、こんな感じで今日の隣人部が始まっています。星奈？窓側に座って静かにしていますよ？声も荒げず静かなものだ、一体何があつたのやら……？

星奈

「縁？おしとやかな子が好きって話は？」

縁

「それは前話までだな、「前話！？」今はどうでもいいわ」

それを聞いた途端に星奈は人の膝に飛び乗ってきた。

星奈

「縁のひざ枕」 縁「頭撫でて撫でて」(・>「<・)」

小鷹

「……あの二人は放っておこう、えーっと……楠だっけ？」

小鷹くんが名前を確認すると楠幸村くんは財布を取り出して小鷹くんに渡した。

幸村

「三千円しかはいつていませんが、かんべんしてもらえますか？」

小鷹

「カツアゲじゃねえ！どこに財布巻き上げるようなシーンがあったよ！？」

夜空

「あ、あん？三千円で小鷹の何を満足させる気だ貴様、小鷹を福沢さんのいない財布に手を出す小物と一緒にするなよ？」

小鷹

「入っけていてもやらねえよ！？クツソ話が進まない……………！」

縁

「まあ要は幸村くんは立派な日本男児になるという願いを叶える為に小鷹くんのストーキングをしていた訳だ」

小鷹

「説明ありがとう……………」

なんだ？話が進まないから進めたのに

夜空

「男児といつたな……………」

縁

「ああ、男児だ」

夜空

「小鷹、今同性との恋愛がどんなリスクを負うものか説明してやる

から早まるな」

小鷹

「早まってるのはお前だ！？ホントにどうした夜空！」

星奈

「しっかし女みたいな男ってあたし初めて見たわ。つーか首を傾げるんじゃないわよ、やたら可愛いから……」

星奈もとりあえず納得したらしい。まあ、幸村くんは俺や小鷹くと違って『ついてない』けどな。

ん？何が？……言わせるなよ恥ずかしい（棒）

お、夜空が落ち着いてきたらしい。

夜空

「で、性別は男として、この男の娘は何故小鷹を付け回していた？」

幸村くんは表情一つ変えずに淡々と答えた。

「じつはわたくし、いじめをうけているのです」

幸村くんの言葉を聞いて特に小鷹くんの表情が憂鬱なものになる。

夜空はいじめは何処でもある当たり前のものだと肯定し、小鷹くんも納得せざるおえない心境らしい。

夜空の説明を聞きながら小鷹くんは皮肉混じりの台詞を言うと、憎々しげに夜空は小鷹くんを睨む……また会話が聞こえないあたり俺

は興味が無くなってきたらいるんだろう。

自分が傷付かずに他人を攻撃するのが本能的に大好きな『人』はみんな割と軽い気持ちで他人を傷つける。

気に入らない相手を叩いたり虐める相手の落ち度を見つけて大義名分を得ての虐めは更に楽しいだろう。

……余談だが星奈は虐めをしたことがない、虐めを受ける立ち位置になりやすいが、容姿や成績、親の権威で直接的な被害はない。そして虐める立場を嫌い、自分が虐める立場になる事もなかった。……正確には一度だけあったが……。

星奈

「縁……」

気がつくとも星奈が俯きながら俺の手を握る、いつもより泣きそうな顔をしていたのは多分俺の顔が怖いから、震えているのはきっとまた俺が冷たいから。

縁

「怖い顔してたな」

頭を撫でながらゆっくりと体を寄せる。強張っていた体を少しずつ預けてくれる星奈は俺を温めるように抱きしめてくれた。

小鷹

「幸村君！俺を付け回していた理由を教えてくださいませんか！」

夜空

「そつだな！まずは空気を換気することから始めよう！」

さっきまで喧嘩してたのにもう息を合わせていやがる、何故だ？

星奈、空気読むって何の話？

そしてさっきまで二組のやりとりを眺めていた幸村くんが答えると隣人部にまるでありえないものを見るかのような空気が生まれた。

幸村

「どつすれば小鷹せんぱいのように強くてかつこいいおとこになれるか、学ぼうと思ったのです」

あれ？さっきも俺同じ説明したのに何、この温度差……

第十一話 思った以上に進められなかった(後書き)

次こそは終わりたいです。

P.S.

ちよつとアンケートみたいなものです。

100件突破記念にオリジナルで書きたいのですが、読んでくれる方のリクエストを話にしてみたい……って願望があります。

無理難題を押し付ける感じで申し訳ありませんが私に「書かせてやるよ」もしくは「読んでやってもいいぜ」みたいなネタの要望があったらメッセージや感想に書いていただけないでしょうか？

完成がイメージと違ってしまつのは許して下さいm()m

ではまた！

第十二話 火のないところに煙はたたない(前書き)

仕事の合間にやるといっても期間が開いてしまい申し訳ないです m
—— (m)

第十二話 火のないところに煙はたたない

「どうすれば小鷹せんぱいのようにつよくてかっこいいおとこになれるか、学ぼうと思ったのです。」

楠幸村の台詞に誰もが信じられないものを見た顔をする。というかひらがな読みづら！

「つ、強くてかっこいい……あつひゃひゃひゃ！！このヘタレヤンキーがあ！？……痛い痛い痛い！！」

星奈が爆笑していると夜空が脇をグリグリと肘で押していた。

「で、強くてかっこいい小鷹の弟子を希望したわけだ」

幸村は夜空の問いに少しはにかみながら頷く。

「同性とは思えないほどに可憐だねー小鷹くん、見惚れる気持ちも解らなくはないよ」

「え！？あ、ああ……」

楠幸村の仕様に妙なテレを出した小鷹くんは急に話を振られて軽く慌ててる。夜空は表情が変わってないが星奈の引き攣った顔が二割程強張ったので威力が上がったのは間違いない。

楠幸村はそんな俺以外の先輩達の様子をきにせずに続ける。

「むれることなくさっそうと肩で風切って歩くそのおすがたは、まさしくりそこの」(……聞き取りにくいから勝手に変換するか)「

……【変換】……群れることなく颯爽と肩で風切って歩くそのお姿はまさしく理想の日本男児の姿です」（よし、少しはマシになったな）」

「む、群れることなくつて……ハア、ハア、……た、単に、友達が……いないだけじゃな」肉、そんなに胸が大きいと下乳が蒸れるだろう、スモークになる前に手をかしてやる」あ痛あい！！」

黙ればいいのに横槍をいれたせいで星奈はまた引き攣った顔になる。つーか夜空さん？下乳持ち上げてブラのワイヤーを抜き手でアバラに食い込ませるとか鬼かアンタ……そして尚も楠幸村の小鷹節は続く。【ここからは常時変換させてもらう】

「つまり規則に縛られることなく己の生きたいように生きるその姿は、豪放にして磊落。欲望の赴くままに金品を奪い、意に沿わぬものは力をもって排除し、美女をはべらせ酒池肉林の限りを尽くす。人の世の善悪を凌駕し、神をも恐れぬその振る舞い、まさしく天上天下唯我独尊」

「ちよつと待て！？なんだその三国志の董卓とつたくみたいな暴君キャラは！？俺はちゃんと校則守るしカツアゲしたことも自分から暴力を振るったことも女を侍らせたこともない！」

全力で否定する小鷹くん、むしろよく董卓とか一発ででたよね、そっちにビックリした。

「つまり董卓くんは【校則守る】し【カツアゲはしない】し、【暴力もふらない】、【女を侍らせたこともない】……と？」

「董卓じゃねえよ！普通に名前呼んでくれよ！？」

「まあ、それは問題じゃない。とりあえず入学してから一ヶ月思い出せ」

テンションの上がり始めた小鷹くんは懨然としながら黙る。

「とりあえず確認な、入学初日に遅刻して授業中に登校したのは自分でどう思う？」

「……………」

一瞬で小鷹くんの顔が引き攣った。

「どう思う？」

「……………校則……………というより学生としての規則違反だと……………思いま
す」

にこやかに問う俺から視線を外す。

「モン狩りやってた頃にカツアゲ被害にあったって二年生を何人か聞いた気がするなあー（笑）」

「あ、あれは違う！トレードなんだ！協力プレイなんだ！！」

「あー、小鷹？それ私達のクラスまで広がってる……………か、ら、あ……」

そう、モン狩りの頃に「羽瀬川がカツアゲを始めた」って噂がクラスに流れてた。夜空、星奈をとことん喋らせない気か……………あ、涙目

でこっち見てきてる。

「で、女を侍らせた事はないって話だが……」

「そ、それはないだろ！？俺なんか女子が怖がって寄らないぜ！」

サムズアップで断言する小鷹に少し申し訳なさそうな顔で夜空が答える。

「……すまん小鷹……今日の昼に女子に囲まれて」「三日月さんと柏崎さん羽瀬川になにされたの？」と真剣に心配された……」

小鷹くんがありえないものをみるような表情でこっちを見てきた。うん、「むしろ犠牲者俺じゃね？」みたいな顔やめれ、クールビュ―ティで通ってる夜空があんななったらまず皆小鷹くんを疑うから。

「……だ」

「ん？」

「まだだ！！」

そのありえないものを見るような顔で目をカッ！と開くなよ星奈がビクッてしたぞ。

「暴力はふるってないぞ俺！！」

そう力説する小鷹くんを星奈がプルプルとしながら答える。あ、その前にとりあえず夜空がまた攻撃しそうだから止めて星奈をこっち

に寄せる。

「……えっと、小鷹？パパがカウンセラーの先生から報告受けたら
しんだけど……小鷹来てから精神的に辛いつて相談に来る生徒や
先生が……その……増えたって……」

「いやいや！？俺関係なくね!？」

「女性の先生が一番のカウンセリング利用者で「男子生徒の前に立
つのが怖いんです」……だって」

「俺は無実だろ!?!むしろ訴えてやろうかその教師!」

おお！テンション高い高い。

「じゃ、じゃあアンタが転校初日に授業中の女教師を皆の前でいき
なり襲ったって噂はデマだったのね」

星奈がフォローのつもりで笑顔になったがそれがまずかったらしい。
小鷹くんどころか夜空まで青くなった。

「あれが原因か……!?!」

どうやら思い出す節があったらしい。

「同じ理由で女子も部活終わってから暗がりを一人で帰るのが怖いっ
てのは放課後まで図書室で小鷹くんが本読んでるからだろうな、部
活帰りの女子を物色してると思われてるんじゃない?」

「流石です、小鷹せんぱいは噂どつりの男の中の男でした」

楠幸村がそこまで言って完全に小鷹くんが崩れた。

【火のないところに煙はたたない】

理不尽だがここまでぴったりの言葉はないだろうな……

あ、楠幸村からイジメの内容聞いてないじゃん。

第十二話 火のないところに煙はたたない（後書き）

幸村登場が思った以上に進まない！？

どうしよう……次で終われるかな？

第十三話 小鷹くんは意外と人に好かれやすいらしい(前書き)

幸村登場シーン終了、時間かかったなあ……
あと今回意味不明が多いです。

第十三話 小鷹くんは意外と人に好かれやすいらしい

状況説明……

羽瀬川小鷹くんから『真の男とはなんたるや』を学ぼうと陰ながら見続けてきた楠幸村、彼の持っていた小鷹くんのイメージは小鷹くん本人が否定したくとも、実際に起こった出来事であって彼は何一つ否定出来ないことばかりだったのであった……

「一人で天井見て何やってんの？」

前回までのあらすじ〜みたいなのをやっていたのに星奈には伝わらないらしい。

「……なんでもない……」

諦めて周囲を見回すと地に伏せた小鷹くんがいた、夜空はまたコーヒーを入れている。あ、今日は砂糖の量がいつもより多いぞ。

「ほら、飲め小鷹」

「……………ああ」

受けとった！？受けとったよ！？ショックで前とデジャヴュしてんの気づいてないよ小鷹くん！！……………どうでもいいけどね。

「えっと、幸村はいじめられることがないような強い男になりたい

のよね？」

状況が進まないので星奈が無理矢理進めた。

「はい、わたしくしもだんしとして生を受けたいじょう、」（ややこしいから【変換】しよう）「小鷹先輩の如くありたいものです。どうすれば小鷹先輩のような偉大な人物になれるでしょうか？」（よし、【変換】は問題なさそうだな）」「」

「い、偉大なつていわれてるわよ小鷹、ほら、元気だして答えてあげなさいよ」「

「ほつとけ……」

あーあ、いじけちゃつたら。しょうがない俺も助け舟を出そうかな。

「じゃあ楠幸村、どんな風にいじめられているか教えててやれ」

「なるほど、皆様にわたくしの生活をおはなしするのですね………はずかしいです」

少し頬を赤くすると本当に美少女だよねこの子

「縁？今縁から美少女可愛いって電波が来た気がするわ」

………どんな電波だよ………

楠幸村話中

「おい縁」

あ、今度は夜空だ

「何？」

「こいつの話を今小鷹が聞いているのだが……何故だろうな？仲間外れというより……」

「あ、気がついた？こいつの仲間外れつてのはぶっちゃけると楠幸村を男の娘として見ちゃってるからなんだよ」

「……そういうことか」

夜空が納得いったようであぐらをかきため息をする。あ、ちなみにどんな仲間外れかというところ……『着替えが始まると皆が離れる』とか『球技をやる時と狙われない』とか『トイレに行く時と皆が離れてそそくさと出ていく』みたいなもんだね。まあ……例外として……

「幸村君……」

………例外の人来たかったよ………

部室に現れたのは身長が180センチはありそうなガタイのいい男子生徒。何て言うかな……そう、美術室にあるような彫刻みたいな濃いイケメンだ、確か名前は………忘れた。

「なんだ貴様は」

夜空はなんの遠慮もなく不審者を見る目をしている。

「……………」

星奈は俺の後ろに隠れている、昔からこの手の濃いイケメンが苦手なんだよなコイツ、濃いイケメンは話を続けた。

「失礼しました先輩方！自分は一年の穂茂屋ほもやといます！今年スポーツ推薦で入学して柔道部とレスリングに誘われている者です！！」

語尾が全部！って凄いな、っーか誰も部活の事なんか聞いてないし。

「穂茂屋君、何度こられてもわたしくしの気持ちは変わりません」

「幸村君！僕も君への思いは変わらないんだ！！」

なんか無駄に熱い奴が来て勝手に楠幸村と話を始める。星奈はもとからだが夜空まで気味悪がってきた。

「おい縁何なんだコイツは」

「言つたる？スポーツ推薦受けた新入生ルーキー」

「二つもなんて普通ないだろうが」

「今年の一年は中々豊作だったらしくてさ、学長……あ、星奈の父親な？その人が色んな手を使って特待生をかき集めたらしい」

納得いかない顔をしていたようだがこれは本当の事、確か他にも特待生は多く入れた筈だ、中には学費免除や授業料も多々入っている……これらが少数の【生徒】を入れたいが為の力モフラージュらしいが、スポンサーにうちのオヤツサンがいるからやれるとか言っていた気がする。……オヤツサンは何をしたんだらうか？

……話を戻そう、この穂茂屋とやらは楠幸村の問題の中で唯一人、楠幸村本人に被害の及びそうな人間だ。

別に元からこうだった訳じゃない、推薦貰って春休みに部活で励んだ頃は将来を有望視されていたのだから。問題は今月だ、クラスで一人ぼっちの楠幸村を可哀相に思い、自ら踏み出した彼は……

……別の扉も開いちゃった。

俺と楠幸村が会ったのも丁度そのタイミングだったんだが……いやあ……あれは無い……、だってレスリングのパツパツの服で花持って来るんだもん。多分楠幸村でなくともドン引きだよ。

「僕の想いを聞いて欲しい！僕が君を一人にしない！」……みたい
な感じの台詞だったんだが、残りは忘れた。とりあえず台詞が熱か
ったのだけ覚えてる。

「穂茂屋君、わたくしにはもう心に決めた方がおられるのです」

絶対勘違いするから楠幸村はその言い方をやめろ。

「なんですって！？一体誰なんですかその男は！？」

既に関わりたくない夜空は自分が持つて来た本を読み、星奈はゲームをつけはじめた……誰か話ぐらい聞いてやれ。

「わたくしは、こちらにいる小鷹先輩に生涯尽くすと心に誓ったのです」

誤解されそうな発言に夜空は眉間がピクピクと動いているが大丈夫だろうか。

「小鷹！？聞いた事の無い名だ！そんな何処の誰とも解らない黄土色に幸村君は相応しくない！！」

「貴様に小鷹の何がわかる！！」

無視を決め込んだ夜空が急に熱く反応する。

「小鷹がどんな奴かも知らないで知ったふうな口を叩くなよ！小鷹は「ふん！わかりたくもない！小鷹先輩とやら！貴方も何か言い返したらどうですか？」……貴様ッ！」

夜空の反論を無視する形で遮る穂茂屋。外見だけで小鷹くんを見下し、けなす姿に夜空は怒りをあらわにする、そして反論する夜空すら軽んじるその姿に先程までいじけていた小鷹くんがゆっくりと起き上がる。

「おい……」

いつもと違う声音、明らかに怒気を帯びている。

「いきなりベラベラとうるさいんだよ……お前らに興味はないんだ、何処で何をしようが勝手にやってる。だけどな、これ以上こいつの前でふざけた真似するなら容赦しないぞ」

突き放すような冷たい声と敵意、どうやら夜空を軽く見られたことが許せないらしい。

暴力などはなく、睨み合うだけだったが、その空気にも負けたの穂茂屋はそのまま部屋から出て行った。何故か頬を赤らめて小鷹くんを見つめたのが気になったが、まあどうでもいい。

「小鷹……」

夜空が心配……というか不安そうに声をかける。

「……ああ、ごめんな夜空」

普段と変わらない空気が変わる小鷹くんにしほつとした様子の夜空、そして今までのやりとりをみて楠幸村が一層熱の籠った瞳で見つめている。

「あの穂茂屋君を睨み合うだけで退けるとは……流石です、小鷹先輩……」

「いやいや、違う違う」

「この楠幸村、是非とも小鷹先輩の下で真の男の道を学ばせて下さい」

深々と頭を下げる楠幸村、その姿に慌てる小鷹くんと入部を断ろう

とする夜空、だがその空気を今までゲームをやっていた星奈がぶち壊した。

「いいわ！楠……幸村だっけ？この隣人部で小鷹と共に真の男の道を学ぶといいわ！」

「！？ふざけるなよ肉！」

「ちよっ待ておい！！！」

反対しようとする二人を横目に入部届けに名前を書かせる星奈。

「どうゆうつもりだよ…（コソツ）」

「え、だって理由はどうあれ男の娘よ？手放す訳にいかないじゃないかい
い」

星奈はサムズアップしてにこやかに答える……こいつ今のやりとり完全に無視してやがったな、肝心の楠幸村本人が入部出来る喜びで小鷹さんに「あにきとお呼びしてもよろしいでしょうか」と聞いている、これじゃ舎弟だな。

夜空はぶすつとした顔だったが楠幸村に「あにきの名譽の為に我が身をかえりみずに立ち向かう姿、お見それしました」と言われたら、満更でもないらしく、ちよっと誇らしそうだった。

後日、楠幸村が小鷹さんのクラスを聞きにやってきた、何でも舎弟としてパンを届けに行くそう。帰り際、クラスの誰かから羽瀬川小鷹が後輩をパシリにしているという噂を聞いた。

問題は放課後、小鷹くんが帰る後ろ姿を熱い視線で見つめている男が一人。

……何と言つか……身長が180センチはありそうなガタイのいい男子生徒、なんだろう、美術室にあるような彫刻みたいな濃いイケメンだ。……誰だよ!?

「はっ！真白先輩じゃありませんか！」

凄いな、語尾が全部！だよ、何コイツ。

「失礼！これから自分は小鷹先輩へ自分の思いを伝えに行かねばならないのです！」

「思い？」

「はいっ！自分を圧倒した姿！まさに自分が愛して止まない理想の男性そのものです！自分はこの愛を伝えたいのです！はっ！小鷹先輩が行ってしまう！！では先輩失礼します！！」

……誰か知らないがとりあえずなんか危なそうだから気を失わせ
た。

巻き込まれたくないから記憶から小鷹くんを抜いとくか。

第十三話 小鷹くんは意外と人に好かれやすいらしい(後書き)

思いつきでキャラを乱入させるもんじゃないですね。

第十四話 まだ仮入部でした。

いつものように部室で思い思いに過ごす隣人部……

小説を読む夜空

夜空に騙されてメイド服を着る楠幸村

紅茶を楠幸村に受け取り飲んでいる小鷹くん

耳掃除をやられて大人しく俺に膝枕されている星奈

「はいおしまいー、動かないでいて偉かったぞー星奈ー」

ゴミを片付けて星奈の頭を撫でる俺。

「えへへー（*^ ^*）縁縁、ひざ枕もうちよっとしていい？」

「もうちよっただけなー」

「わーい〇）（〇」

テンション高いなあ星奈は。

「……あ」

夜空が思い出したように本から顔を上げた。

「どっした？夜空」

小鷹くんが夜空の方を向く。

「隣人部の活動をしなければ」

……………今更だな……………

「では隣人部の今日の活動を決めよ「ちょっと待って！」……………チツ何だ肉、邪魔をするな大人しく挽き肉になっている」

「いきなり酷くない!?……………あ、でも縁と合挽肉とかだったら別に……………」

「そついう問題じゃねえよ!?!」

星奈 夜空 星奈 小鷹くん

会話すると基本的にこの流れだな。

「星奈、話進まないから用件言ってくれない?」

「割合は幾つがいいかしら」とか真剣に考えないでくれない?人間合挽肉とかかなりスプラッタな光景だからね。

「今日担任に言われたんだけど、縁の入部届けがまだ受理されてないらしいのよ、夜空どういう事よ?」

星奈が割と真剣な表情で聞いてくる。そういや俺まだ部員じゃなかったね。

星奈の問いに事もなげに夜空は答える。

「入ってすぐの頃に言っていた筈だぞ、『自分は仮入部でけっこうですので肉は棚に陳列してください』と」

ちょっと意味が違うが確かに言ったな仮で良いつて。

「では夜空のあねごと、きょうだいはいつから入部なのでしょうが？」

楠幸村が不思議そうに尋ねる。……………あれ？

「幸村、兄弟がいるのか？」

疑問に小鷹くんが尋ねる。うん、確か楠幸村に兄弟は……………あれ？
いたっけ？

首を傾げていると楠幸村はいつもの笑顔で答えた。

「あにき、きょうだいというのは縁の事です」

「はあっ！？何で幸村と縁が兄弟なのよ！義兄弟？！桜が咲いてる島の義兄弟で血が繋がらないから恋愛オツケーですみたいなルー」
「黙れ肉」どぐつ！

妙に興奮した星奈にハードカバーの本をぶつけて黙らせる夜空、本
当容赦無いな。

「で、なんで縁と幸村は兄弟なんだ？」

「おなじぶかつであにきの下でまなぶ同士として、わたくしと縁は兄弟なのです」

「いやいや、兄弟じゃねえし！友達だからな！」

「いや、友達じゃねえし、部活の知り合いなだけだろ？」

楠幸村は当然のように語っているが小鷹くん的には納得いかないだろうなあ……あれ？なんで小鷹くん落ち込んでるの？

「小鷹……名前を覚えてるだけアンタはマシよ」

「小鷹、コーヒーじゃなくてミルクティーをいれてやる」

「あにきの舎弟ではないのですね、しつれいしました、縁の旦那な
思い思いに慰める皆によって傷口がかえってえぐられている気がするんだが。」

「は、話を……戻そう……」

あ、立ち直った。

「あ、ああ入部だったな。待ってる、今申請の紙を用意してやる
入部か……」

「やっぱまだ仮入部でいいや」

「「「は?」「」」

全員「何言ってるのこいつ?」「みたいな顔してるけど、まだ入部とかしたくないんだよね」

「じゃ、俺バイト行くから」

鞆を持って立ち上がる俺、その後ろから慌てて星奈がついて来る。

「あにき、わたくしは何か粗相をしたのでしょうか?」

幸村が表情を曇らせて尋ねる。

「いや、そんなんじゃないと思うぞ。……でもなんで入部しないんだろうな?」

「私が知るか」

不思議そうに尋ねる小鷹に夜空はどこか悔しそうに答えを返す。

それぞれが二人が座っていたソファアをちらりと覗き、少し淋しさを感じていた。

「……縁」

二人で帰る途中、星奈が話かけてくる、特に返す事もなく歩く。

「…………部活入らないの？」

そついや今日シフトは掃除だったかな？

「…………部活…………つまらない？」

清掃は楽なんだけどなー、片付けをやるとなるとまた怪我しないように気をつけなきゃなあ…………

「あ、アタシは満更でもないわよ？縁いるし、夜空は…………まあたまに嫌だけど、人も増えたし。その…………部活自体は嫌…………じゃないし…………」

メール今日誰からかなー

「…………縁」

話を聞いていない。ただそれだけが真白縁では意味が違う。
一緒に過ごす時間の長い柏崎星奈すら時に真白縁には景色や物と変わらない。

ただ一点を除いて。

「私がいると…………嫌じゃない？」

寂しさからの問い、自分が手放しに誉められる存在でも真白縁はそうは考えないかもしれない、真白縁だけは違うのだから。

答えずに歩く縁に涙を浮かべる星奈、そして歩く足が自然と止まり

そうになった時に真白縁は振り返る。

「星奈とは離れないよ、星奈が離れたいなら止めない、けど俺は星奈がいいならと星奈といれるだけ傍にいるよ?……約束したろ?」

「……………うん」

喜びと共に来る悲しみ、星奈自身がどう思おうと真白縁は約束がなければ星奈すら景色と同化してしまう事を証明してしまうような答えだった。

「じゃ、バイトね俺、一人で帰れる?」

「もう、帰れるわよ。ばいばい縁」

いつまでも寂しさを感じていても仕方ない、星奈は前向きな事を考える。買いたいゲームの事、攻略したいキャラの事、買いたい服の事、今日の夕飯、宿題、縁に見せる事を挑んで買ったがまだ恥ずかしくて封も開けてない下着。

星奈は無理矢理にでも前向きに考えて縁に『普通』に会える明日を考えた。

真白縁が柏崎星奈を認識しきれている理由はその【約束】の為、故に柏崎星奈を経由すれば第三者を認識する。

真白縁自身は自覚しているかは定かではない、柏崎星奈が認めているかは解らない。

ただ、真白縁という存在にとって

柏崎星奈がいなければ

世界は

何も感じる事が出来ない透明なものだった。

第十四話 まだ仮入部でした。(後書き)

次回はギャグを書きたいな

第十五話 久しぶりに二人きり（前書き）

どうしてこうなった！？

第十五話 久しぶりに二人きり

今日は部活に行かずに星奈の星奈の家に来ている。何故か元気がなさそうなので一緒にいる事にした。

「えへへ」

元気ないと思ったら膝枕一つで随分とにやけた顔になっている、星奈は機嫌良い時と悪い時が激しいな。

「星奈ー、もう膝枕やめていいかー？」

「んー……もうちょっとー、縁お腹撫でて撫でてー」

言われた通りにお腹の辺りを撫でる。

もう制服じゃないのでかなりラフな服装の星奈、今日はピアノの鍵盤と音符の模様のパジャマだ。

……余談だが、俺もサイズ違いでこれを持っている。パールツクのコーナーで半ベソかきながら買ってとねだる星奈は正直面倒だった……

「ねえねえ、縁はこのパジャマ使ってるの？」

何を察したのか星奈は嬉しそうに聞いてくる……ヤベッ俺ビニールからも出してないや。

「たまにな」

「ダウト、前に行ったらビニールから開けてすらなかったわよ」

……ばれてました

「買ったんだから使いなさいよー」

人の頬を伸ばしながら抗議する星奈、何となくその頬を指で突きながら答える。

『そんなこと言っただってしょうがないじゃないか星奈君、縁君だってイロイロ考えがあるんだよお』（縁裏声）

星奈の部屋のぬいぐるみが。これって確か去年ゲーセンでとってやったんだよな

「あれ？なんで!？」

ぬいぐるみを見て驚く星奈、だがまだ終わらない。

「腹話術」（声・夜空）

「夜空の声までできるの!？」

「一度聞いた声なら大抵は真似できるからな」（声・小鷹）

「……………すご……………ってもう腹話術関係ないし!」

俺の声真似が気に入らんのかね星奈

「そついや気になってただけだよさあ」

俺が笑顔で星奈を見つめる。星奈は引き攣った笑顔で笑い返す、俺がこっぴどい笑いをしたら大抵星奈が弄られる事を自覚しているから。

「このパソコンになかなあゝ 気になってしょうがないなあゝゝ」

「な、なんでもないわよ」

「なんでもないのかー パソコンに刺さってるイヤホンが気になっ
てしょうがないなあ」

立ち上がってパソコンへ行き、イヤホンを素早く抜き取る。

「わー！ダメダメダメダメダメダメダメダメ！」

星奈が飛び掛かってこようとするので最近覚えた技を試す。

「縛道の一『塞^{サイ}！』」

ビキッ！という音と共に星奈は体が固まり床に倒れる。

「な…なによこれえ！？」

「最近クラスメイトから借りた漫画にあった技でな、着物を着た死神の技の一つだ、字が合ってるか知らないけどな」

「待って！字とか大した問題じゃないから！どうでもいいから！むしろ漫画を実際にやったのがおかしいわよ縁！」

「なんとなくでやれるもんだよな！。他にもさ、黒棺とか一刀火葬とかって技あるから今度練習してみるよ」

どんな電波受信してるんだよ！？あれ、もう一件？

『From 星奈の家のメイドさん』

『流石に出来てから婚約は天馬様の体裁もありますので本日は避妊をしていただけると助かります。もし我慢出来ないのであれば僭越ながら、わたくしが受け止めさせて頂きます。あ、お嬢様にはわたくしから説明しますのでもしわたくしが』

俺は勢いよく携帯を閉じた。何故俺がこんな目に……

「めーる？（ベそ状態）」

俺は無言で星奈の下へ行く。俺だけ凹むのは嫌だ、仕返しをしてやろう、久しぶりに弄り尽くそう。

「マウス使っていると必然的に左手でしちゃうよね」

ビックウ！と星奈の体が跳ねる。

「俺が来るまでずっとやってたんだ……」

「ち、ちよつとよ、ちよつだけ……」

目がさつきよりも泳いでる、まるでバタフライみたく。

「一人でこんなシーンで何してたのかなあ？」

「うっっ……うっっっ……」

「下が濡れてたのはそーゆう事かあ」

「えっ！？ま、まだ触ってない！」

嘘だよ阿呆、っーかこいつ「まだ」って

「か、勘違いしないでよ縁！これはエロゲーでもあるけれど美少女ゲーム業界で今一番話題になっているゲームで愛と感動の大冒険ファンタジーなの！このシーンは数多くの苦難を乗り越えて「もういい長い、大冒険エロゲーファンタジーやって興奮してたのは解ったから」ふぐっ、エロゲーって途中に入れないでよ！」

必死に抵抗しちやいるがエロゲーやってた事実が変わらないからな

……

「で、「まだ」って事は興奮しちやった星奈ちゃんは何をしようとしたのかな？」

その問いに更に星奈は赤くなって俯く、きっと今俺は楽しんでいるに違いない、だって星奈が顔真っ赤にして恥ずかしがってるんだもの、下をモゾモゾしてるのは黙ってこよう。

「……………その……………（言えるわけないじゃない！シーンをいつもみたくあたしと縁に被って……………ああっ！絶対に縁でも変態だと思っ！）」

┌

「言えない事を考えていたんだな……………変態」┐

「ちっがうわよー！！」

トドメの一言で星奈が涙目で抗議する。

「まずネットで『ときメモみたいに女の子と仲良くなるゲームのオススメを教えてください』って尋ねたのよ！」

「普通は十八禁表示あるだろ？」

「アダルトは知ってるわよ！だからてっきり大人でも楽しめると思っただのよー!!」

「なるほどねえ、まあ事情は把握した」

「わかってくれたのね縁」

だからこそあえて一番傷つけたいんだ星奈

「ド変態が、痴女、色情狂、ビッチ、アバズレ、売春婦、公衆便女、猥褻物、淫乱、牝豚あ！」

「そ、そんなけなさなくていいじゃない!!」

涙目でキレル星奈をふんずけて更に加速させる。

「星奈が何を抗議しようとしてエロゲーやって濡らす事実が変わらないよなあ！エロシーン見てドキドキしちゃった変態ちゃん俺が来るまで何企んでたのかなあ！」

「ち、違っ…あたしはセシリアと仲良くなりたくて……」

「セシリアちゃんも可哀相になあ！まさかピュアな心で信念貫いた自分を卑猥な目で見られちゃってなあ！」

「……違うもん、そんな気持ちじゃないもん」

最後のが致命的らしく星奈の声音が変わる。

「縁と…えうっ……そんな風になりたい…けど……あたし……グスッ……」

あー、やりすぎた泣いてるよ。つい120パーセント俺が悪い。

「せ、星奈？俺が悪かった、やり過ぎた、な？ごめんな？」

「うううううううううう」

涙を流す星奈を抱っこしながら泣きやまず。

「なんかお詫びしなきゃな？何して欲しい？」

ちよつと卑怯かもしれないが今はこれしか無い

「……これ」

星奈は涙を拭いながらゲームを取り出す。……何て言うか……エロゲーの……その凌辱というか……調教……とでもいうか……まあ、完全なエロ。

「………星奈？」

「これあたしが読むからもっとさっきみたいの………して」

……え？

「さっきの縁……いつもと違って乱暴で、ひどいし、あたしいつもと違う怖さがあったけど……ちょっといいかもって……思ったし」
……星奈が変な扉を開きやがった！！

「だから……続き……して」

「や、今日は……その……」

「お詫び」

今度は俺が止まった。一回言ったことを撤回するとか絶対にやだ。

その後何をやったのかは教えられない。

「やりすぎだな……本当に」

部屋で嬉しそうな顔でぐったりとしている星奈、表情が心なしかくつきりとして清々しい……

「と、とりあえずパソコン、部屋でやっちゃダメだから……」

「ふあい……ご主人さまぁ……」

まだ役になりきっている星奈にちよつと罪悪感を感じながら俺は星奈の親父さんをふりきりながら帰路へ向かった。

ん？またメール？

『From 星奈の家のメイドさん』

『声だけでは斬新なお楽しみ方ですね、ですがお二人とも盛り上がったようでなによりです、しかし縁様ご希望ならわたくしもブルマ、スクール水着、レオタードを用意しておきますのでいつでも声をおかけになってください。あ、ちなみにわたくし星奈様程に見られないかもしれませんが実は胸のサイズが星奈様よりも大きいです。ロケット型とでもいいましょうか、星奈様程の柔らかさは無いかもしれませんが負けず劣らずで何よりハリと弾力は間違いなくわたくしの方がいいですよ、ちなみにわたくし、先端の感度がよく擦られると……』

俺は全力で携帯を逆パカして明後日の方向にぶん投げた。

第十五話 久しぶりに二人きり（後書き）

前話のテンションを完全に無視、なんか清々しい気分です（キリッ

一日に二話やったからなー次はプールですな

第十六話 スリットってドキドキするよね？(前書き)

小鷹×夜空の妄想&楠幸村への妄想

コラボレーション!!

反省している。

第十六話 スリットってドキドキするよね？

部室へ小鷹が行くと、既に全員揃っていた。(一部除く)

「夜空、縁と星奈は？」

「知らん」

本を読むのに夢中になっているようでかなり適当に返されてしまう、幸村は……今日はメイド服じゃなくチャイナ服か……また星奈が持つて来たな、大体胸がブカブカしてるから解りやすい。まあ、なんであんな衣装を揃えているかは聞きたくないが。

「あにき、今日は烏龍茶です」

「ああ、ありがとう」

「胡麻団子もいかがでしょう？」

見ると、トレイには胡麻団子がのっている、微かに香る胡麻の香ばしい香りが放課後の空腹を刺激してくる。

「もらうよ、ありがとう幸村」

「きょうしゅくです」

ニコリと笑いながら丁寧に頭を下げ、ポットの横に座る幸村、振り返る時と座る時にスリットが動き、太股が少しだけ露出する。何故か俺は見ちゃいけない気がして視線をずらした。

「……………スカートに少し切れ目が入ってるだけだろうが、私が階段の上を歩いていようがスカートを気にもとめないくせに…はっ！？まさか男がスリットをしているから小鷹は…（ボソボソ）」

視線をずらした先には夜空がいて、汚物を見るかのように蔑み、見下した瞳で俺を見ていた。
小声なのが更に怖い……

「……………何だよ」

「スリットが好きなら私も試しに着てみるのも……………肉に頼むのは嫌だな……………とりあえずド○キに……………（ボソ）……………な、なんでない！」
いやいや、ぶつぶつ言ってる何でもないって……………

「な、なんだこの色欲ヤンキーめ！私はトモちゃんとこの小説を読んでいただけだ！、トモちゃん？トモちゃんはチャイナドレス萌えのこんな黄土色にたぶらかされるなよ？」

「だあれえが色欲黄土色ヤンキーだ！？」

人が気にしてる所にオリジナルティー加えてきやがるから更に夕チが悪い、つかトモちゃん設定まだやってんだな夜空。

「ほう？ならば小鷹、お前は幸村の太股に興奮しなかったと断言できるな？」

「あ、当たり前だ！」

何かを企んでいるような意地の悪い笑みを浮かべて俺を見てくる夜空、笑ってる顔は可愛らしいのに悪意で残念さが際立ってやがる……！

挑発的な笑みを崩さずに夜空は幸村の元へ行き、幸村を立たせた。

……夜空顔真つ赤だけど大丈夫か！？

俺の心配をよそに真つ赤な夜空は……

「……チラツと」

「ゲハッ！」

幸村のスリットを持ち上げやがった！

ちくしょう……なんて威力なんだ……！男なのに……男だっけ解っているのに……！

「どうした小鷹！前屈みになってジリジリと下がり始めおって」

チラリズムを繰り返しながら夜空が進軍してくる……！！

ちくしょう！救援は来ないのか！？

衛生兵ー！衛生兵ー！

「く、くくく……どうしたこ、小鷹 まさか男のスリットに欲情したのではあるまいな？だから貴様は色欲ヤンキーなのだ！」

いや夜空？涙目で鼻噤りながら進むなよ、あと泣きそうな声をやめ

てくれ……

「あねご……恥ずかしい……です」

幸村、お前今喋るな！！自分が今どんなのか理解してないだろう！？

「オ・ノーレ！幸村……男なのに私よりもウエストが細く、肌がきめ細かいとは……ええい、これが若さか！」

一年しか変わらねえよ夜空……

でも今の幸村はヤバイ……

ただでさえ女つぽいのに今スリットを上げられた羞恥心で顔を仄かに赤く染めている、内股で体をくねらせている様はまるで無理矢理……いやいやダメだって、おさまれ俺の性春……

自分の中からくる熱いナニかを隠そうと必死になるが時既に遅く、夜空が涙目になりながら俺の一点を凝視した。

「……小鷹……貴様チャイナ服なら誰でもいいんだな……」

「いや、待て落ち着け夜空」

「いいだろう、そんなにチラリズムが好きならまずはチラリズムの幻想をぶち殺す！！許せ幸村ア！！！！」

何を血迷ったかスリットを両手で掴む夜空、マズイ！絶対バンザイする気だ、バンザイして丸出しにする気だ！

って幸村！？何その「あらあら、まあまあ」みたいな顔は！お前今学校で下着丸出しになるんだぞ！？ちよっとは抵抗しろよ！？

「みさらせえ！小鷹ア！！」

南無三！！俺は祈りを込めて間に合わないと分かっているても飛び出した。

流石に丸出しはまずい。

だがそこで悲劇が起きた……

「痛ッ！」

夜空が進みすぎてテーブルにスネをぶつけたのだ、たまらずよろめく夜空は丁度飛び出した俺の前に倒れ込む。

……そう、飛び出した俺はスリットを押さえる為に低い姿勢で……

夜空は立ったまま俺の真上を通る姿勢で……

つまり、俺は夜空のスカートの中に顔面から突っ込んでしまった！！

当然勢いのあつた俺がスカートに顔を突っ込んだまま倒れ込み、夜空も巻き込まれる。

「あ、あにき！」

流石の幸村も驚いたようだが、すぐに沈黙した。

「痛たたた……小鷹お前え……ひゃん！？」

「悪い」と言おうとしたら顔一面に柔らかくて甘い香りが広がる。ハンカチだろうか？口にふくまれるように布が挟まり思うように喋れない……

「ま、まで小鷹……ち、ちょっと待って……くれ」

夜空が何かを言っているがよく聞こえない、目の前がまだ暗いので俺は頭の上の布を退けた。

「だ、ダメだっ小鷹！」

夜空の声も虚しく小鷹は布を退ける。

フリルのピンク

部屋のライトで明るくなった時、一番始めに目の前に映ったのはこの光景だった。
そのまま離れて行くと健康的で綺麗な肌色と、黒いソックス、そして……

「~~~~~」

声にならない悲鳴をあげそうになる夜空だった。

「……………」

落ち着け俺、これは事故だ、これは偶然だ、決して誰かに非があると認めなければならぬものじゃない……だから冷静に、そう冷静に夜空が実は可愛い趣味の下着だと……違う！！落ち着け俺！

「~~~~~」

「よ、夜空……」

とりあえず沈黙が痛いので話し掛けようとする。

「夜空のあねごと、かわいらしい下着なのですな」

「……」

一番空気を読んでくれると信じていたのに……

「ふ……ううう……ううう」

「よ、夜空、まてまてまてまてまてまて……それはマズイって！ハードカバーは痛いつて」

夜空が持っている本を見て青くなる俺、ハードカバーなのに握力で歪んでやがるだと！

「エ、エンド・オブ・アース……！！」

それなんか違う！

言葉を発する隙もなく吹き飛ばされた俺は扉から吹き飛ばされた。

「私はもう帰る！帰るんだあ〜〜！」

「はい、あねごまた明日」

にっこりと笑って手をふる幸村に涙目で手を振り替えてダッシュで部室から出て行った。

「（仏頂面より可愛かったな……）」

薄れゆく意識の中で関係ない事を考えながら小鷹は落ちた。

第十六話 スリットってドキドキするよね？（後書き）

夜空がもう別人ですね、クレーム、いつでも待ってます。

原作どつりに進めなかったのに気がついたら妄想ばかりですw

第十七話 縁の叔父さん登場（前書き）

やっではいけない風呂敷を広げた気がします……

第十七話 縁の叔父さん登場

放課後、部活へ向かう途中に携帯から電話がかかってきた。

『ハロー、ハロー、愛LOVE マイサンー!!』

「……………ああ、叔父さん？久しぶり」

『……………もうちょいリアクションくれない？』

電話をしてきたのは俺の養父である真白結……………なんというか、パワフルな人間だ。

「珍しいね？毎週電話してきてくれるけど一週間に何度も電話するなんて」

『本当なら毎日電話したいがお前怒ってカナダまで来たじゃん？普通部下も皆俺を捕まえられないのに縁だけは正確に追って来るんだもん、もおトラウマだったね』

まあ毎日電話来たら俺もイラツとするよ。

「で、まだベネズエラにいるの？」

「いや、今いるのは台湾。交渉長引いちゃってさー」

この人の仕事は俺もよくわからない、少人数で渡り歩くマネージメントだと思っただが……………

たまにパソコンにメールが大量に届き、手伝いでコンサルティング

をよくやらされる。

……しかしその内容が広すぎるんだ。金融、医療、書籍、他にも数々のジャンルのデータが送られて上げるだけでキリがない。

まあ、その分毎月馬鹿みたいな額を送られるし、セレブで有名な悪趣味な施設は大抵VIP待遇で利用できるようになっていて、なんでも『縁のおかげで仕事うまくいったからお礼』だと言っていた。

『あ、そーだ縁、例の赤字金融の話な、あれお前のプランで決まり。おかげで潰れる事は無いってさ、『報酬はいつもの口座に』って話だからまた何割か振り込んどくな』

赤字って言っても企業が個人に払うんだ、結構な額になるだろう………使い道のない金ばかり貯まるな………

「で、本当に何の用？話したいってんなら嬉しいけど他にも用あるんでしょ？」

『お 嬉しいねえ、叔父さんの声聞けて嬉しいってか？』

失言だったようで更にテンションが上がる叔父さん、だがすぐに話題が変わる。

『最近さー、星奈ちゃんとは………どう？』

………また始まった………

「普通だよ」

『普通ってなんだよー！？可愛い恋人と毎日ラブラブだろ？学生が半ば同棲で毎日毎日イチャイチャしてにやんにやんしてんだろ？ペガサスの野郎なんか星奈ちゃん泊まり行きたんびに俺に電話してく

るよ』

……星奈には悪いが……あッの馬鹿親父……

「泊まりに来るし、一緒に食事するし、一緒に寝るし、くっついてるけど叔父さん達が考えるようなのは無い」

「……キスした？」

「……たまにするけど……」

「ペガサスに教えていい？」

「残念でした、星奈からの初キスを見られてから結婚話拳がってますよ」

秀囲気に流されるのってあれ以来嫌いだなー

「いやいやいやいや、縁も星奈ちゃんいると大分人間らしくなったねー」

やだ、なんかめんどくさくなってきた。

「切っていい？」

「待て待て、用件言うから」

そう言つと叔父さんはたっぷり時間をかけてとんでも無いことを口にした。

『星奈ちゃんにチケット渡したから二人でプール行ってきて』

「あ、縁ー」

「ふふん 見なさい縁、結さんからプールのチケット貰ったわし
かもこれハイランドホテルっていう会員制の超高級ホテルのプール
チケットよ！客として行ってサービスを確認してくれですって」

説明ありがとう星奈……

今週は久しぶりになんの予定もなかったのに……

「あ、縁？ちなみに予約で『柏崎縁』と『柏崎星奈』で夫婦として
予約してるから怪しまれるなよー」

「あとペガサスが泊まるよう言ってたから帰りは星奈ちゃんちに泊
まってるな」

外堀から埋まるってこついつのかなー

第十七話 縁の叔父さん登場（後書き）

次回、ようやくプール……

早く理科や小鳩を登場させたいな！

……あ、今更ですが100件突破のお祝い小説は原作から脱線させて縁と星奈が二人で携帯買いに行く話にしようと思います。

第十八話 プール その1 (前書き)

すみません、ちょっと遅れました。

第十八話 プール その1

日曜日、俺は星奈と一緒にプールに来た。正確にはホテルだ、前日に調べるところは調べたから今日は星奈と遊ぶだけでいい。

星奈はプールの入口で大きく伸びをしながら満面の笑みで叫んだ。

「プールに……キターー!!!」

「……………着替えてシャワーの前な」

「あ……うん」

そんな無駄にハイテンションな星奈を置いて更衣室へ向かう。

先にこのホテルの説明をしておこうと思う、このホテルは闇雲に広いだけの部屋、高価なだけの家具、形だけの調度品で固められたあの意味形だけの悪趣味な部屋を自慢にしている形だけのなんちゃって高級ホテルだ。

他の客いわく、ホテルマンのサービスが行き届いており、十分満足できるそうだが、海外の貴族を試しに呼んで協力してもらって見たが「申し訳ないがあの場所はもう行きたくない」と貴族に言わせるほどのサービス精神、プール以外にもジムやスパ、料理も豪華なものに見えるがこれも金持ち連中には受けが悪かった。

……………このホテルのメリットって何？

よし、伯父さんへの報告書はこれでいいな。

「縁、それで出すの？」

メールを送ろうとする後ろから星奈の声がした、丁度いい、星奈にも色々と書いてもらおうか……そう思って振り向くと、水着に着替えた星奈がいた。

……プールだから水着に決まってるか。

「えっと……どう？」

星奈は後ろで手を組みながら俺を上目遣いで見つめる。

黒がメインの派手なビキニにパレオを巻いた姿、水着が生地が小さいようで普通のビキニより胸の露出が少し大きめだ、星奈はチラチラとこちらを見ながら胸の位置を直し、落ち着き具合を確認している。

「じゃ、行くか」

俺はそのままプールへ向かおうとすると、星奈に肩を掴まれた。

「どう？縁」

「何が？」

あれ、なんか間違ったか？星奈が少し膨れている。

「水着、今日の為に買ったんだけど……」

「ん……」

言われなくても解ってる、去年の水着とは違うしな。

「……………」

互いに沈黙、星奈が何したいのか全く理解出来ない。

「パレオはあんまりしないんだけど結構いいもんね！薄い水色に細かい金色の刺繍ってなんか趣味じゃないけど！」

「そう？星奈は足も綺麗だからいいと思うけど？」

「あ、ありがと……………（ダメよまだ褒めてないはず……………）……………でも胸がちよつと窮屈かしらね？着た時には平気かなーって思ったけど、縁も目のやり場に困っちゃうでしょ！？」

「……………べつに？」

「……………（プルプル）……………じ、じゃあ行きましようか！？」

星奈が俺の腕に自分の胸を挟んで引つ張る、いつもは服越しただけど今日は素肌同士で互いの体温や肌がよくわかる。

……………あ、伯父さんが必ず言えって言ったのがあったな。

「星奈……………」

「な、なななななに！？」

「水着、良く似合っよ」

ポンッ！……………ペタ

言った途端に妙な音と共に星奈が床に座ってしまった。……………何で!?

「星奈…………?」

不思議そうに顔を覗き込むと真っ赤……………というより紅蓮ともいえる程の赤い顔で口が半開きになっている。

「……………何してん?」

「……………こし……………ぬけた……………」

……………伯父さん、珍しくアンタ間違ったよ……………必ず水着褒めろって言うてたのに。

ひよい

「ええええええ縁!?!?!?!」

「いつまでもいる訳にいかないだろ?」

いつまでもいる訳にいかないので星奈を抱き抱える、お姫様抱っこみたいな感じで。

「あわ、あわ、あわわわわわ」

星奈がガタガタと震えてる、寒いのかな?

第十八話 プール その1 (後書き)

プールに入っていない！！
次回入れなきゃ、そして「キス事件」の真相を……！

第十九話 プール その2 (前書き)

お久しぶりです。

今回は星奈SIDEでつなぎみたいなものなので短いです。

第十九話 プール その2

「んっ、やっぱり少し胸がきついわね」

更衣室で着替えながら一人で呟く星奈、プール……というよりホテルに縁と行けると解ったその日に彼女は水着を買いに行った。

柏崎星奈は自身を完璧だと言うけどその表現はあながち間違っていない。

通る異性が振り向く美貌と学長の娘というお嬢様と呼べる家柄、何より思春期の男には刺激すぎるプロポーションを誇っている。

特筆すべきは彼女の胸、同年代の少女に比べ、圧倒的とも言える彼女の豊満な乳房は同性ですら羨み、憧れる。

十代の少女らしからぬ豊満な乳房はみずみずしい艶とハリを兼ね備え、垂れることなく自身を更に強調するよう自己主張していた。ただ胸が大きいだけでなく、ウエストから腰回りがスラリと細く、まるで絵画のモデルのような姿は間違いなく美少女と呼ばれた。

星奈自身も胸は特に自慢出来る、前までFだったが、高校に上がったすぐにGになった。最初の頃は彼女は恥ずかしい思いをしながらも、買い物に付き合って貰っていたが、今では新しい洋服や下着を買う際は必ず縁を誘って買物に行っていた……縁がDSで星奈は何かに目覚めたが割愛する……

星奈はそんな事を考えながら水着のチェック、胸の落ち着き具合を確かめ、ヒップラインが崩れないよう布をのばしてお尻に弾く。

パチツという音が響くお尻を軽く触りながら、店員に進められるままに買ったパレオを巻く。

「自分で選んだものじゃないけどオススメって書いてあったしね……」

縁を誘う為に購入した大人向けのパレオ、水着もいつもより更に気合いを入れて購入している。

『縁（想い人）と過ごす』

それだけの為に、人が羨む美貌を持つ少女、そして恋する十代乙女の柏崎星奈は愛する少年の元へ向かい……

そして……

「がばっ！こぼこべっ！かぶっ！」

「ほーら頑張れ星奈ー、浮かべてるぞー」

最愛の男性、真白縁の手によってプールに沈められかけていた。

当初の予定通りに水着を誉めて貰えたが、まだ十分に泳げない星奈の為にと泳ぎを教えようとした縁。

彼の決定的にして、致命的なまでの欠点……

それは、人に『教える』という行為が致命的にドヘタだった事だった。

こうして気合いをいれた十代乙女のプールはスパルタの特訓で幕を開けたのだった。

第十九話 プール その2 (後書き)

段々間隔が開いてきてしまい申し訳ないです……

……理科を出したいw

第二十話 プール その3 (前書き)

星奈キャラ崩壊(……今更ですね)

第二十話 プール その3

プールで泳ぐ少し前の話をしよう。

温水シャワーを浴びて俺達は25メートルプールへと来た、そしてそこで星奈は言い出した。

「あたしは今日こそ25メートルを泳ぎ切るわ！」

「……まだ泳げてなかったっけ？」

「忘れないでよ！？毎年練習してるじゃない」

「うわー毎年練習して泳げないとかないわー」

俺が冷めた目で返すとジト目で星奈が返してきた。

「言い返すけどあたしが泳ぎが上達しない理由は縁にも関係あるわよ」

「ははは、何を言っているんだい柏崎さん」

「なんで他人行儀！？」

えー、だって俺のせいにされるなんてショックだったしさー

「それに俺泳げるぜ？」

そういつて俺はプールに飛び込む、そのまま普通にクロールで反対まで行って折り返しでバタフライに切り替える。

そして星奈の前に上がる。

「ふん、どうだ星奈」

これだけ泳げれば文句のいいようはあるまい。

「……その前に聞いていいかしら?……」

ん?

「自分の足元を自分で見てくれない?」

よくわからんが表現の難しい表情の星奈に言われて足元を見る、
…足元はちゃんとしている。

「問題が?」

「問題だけよ!なんで縁は水の上に立ってんのよ!!」

……うん、確かに俺は水の上に立っている、だがしかし。

「泳げる人間として当然の技術だ」

「違う!絶対に違う!超人も当然の所業よ!?」

全く、ラチがあかないな

「じゃあ俺超人でいいからさ、ほら、星奈も泳げ」

そう言っただけ俺は手を引いて星奈をプールに落とす。

「ち、ちよつとま……きゃっ」

そのまま沈む星奈を覗き込みながら浮き上がるのを待つ

1、2、3、4、5、6、7、8、9、10……

「ぶふえあ……!」

お前女の子がぶふえあって……

髪までびしょ濡れの星奈はしゃがんでいる俺の手を掴みながら息を荒くして尋ねてくる。

「はあー、はあー、あ、足がつかないわ!」

「星奈、右右」

「右?」

【水深2メートル 気をつけてね】

看板に書いてある言葉を見て星奈は青くなる。

「出る!今すぐ出るから!縁助けて!」

「Lesson1」

「ひいつ!……!」

俺の素敵な笑顔(仮)を見ながら星奈はまた沈んでいった。

「あー……ひどいめにあつたわ……」

プールに沈められながらあたしは真剣に命の危険にさらされた気がする。

まあ星奈は死んだ最後の人間とか平気で生き返しそうよね……前はなんか長い爪持ってたし、凄い時は何でも『なかつこと』にもしてたから。

プールで沈みながらも泳いでいると、どうやら真っ直ぐ進めれば25メートル泳げてるみたいなので、あたしはプールでぐしゃぐしゃになった顔を洗面所で整え、縁があるプールサイドへと向かう。

「……人の気も知らずに……」

プールサイドへ行くと縁は寝ていた、どうやら飽きたらしい……人の気も知らずにベンチで静かに寝息をたてていた。

「……………」

あれ？チャンスじゃない？

私はそつと縁に近づく……

人形のように整った綺麗な顔を見つめっていると、自分の胸の鼓動が速くなるのが分かる。

細身ながらも鍛えられた胸板にあたしはそつと手を乗せ、少しずつ顔を近づける。

あたしと縁の胸が重なり、私の胸がマシユマロのように形を変える。意識した訳じゃないけれど、柔らかい胸を重ねると好きな人でもやっぱり恥ずかしい。

睫毛の一本一本が数えられる程近く、気づかない程微かな吐息を肌を感じながら私は静かに自分の顔を降ろす。

……………触るか触らないか程度の唇の触れ合い、周りに人がいたかもしれないが私は今縁しか見ていない、違う、縁しか見たくない。

小さく、短いキス……………しかも相手の寝込みを襲うような意地汚いキス
それでも……………

私は一度では足らず二度三度と繰り返す。

小鳥が啄むつばように何度も、何度も、何度も繰り返す。

初めてやる事じゃない、縁が寝ている時は人の目を盗みながら縁にこついつた行為を繰り返してきた。

「何の意味があるのか？」と問われれば何も言い返せず

「卑しい卑怯者」と蔑まれれば黙るしかできない。

そんな背徳を抱えながらもあたしは自分「だけ」の欲望を満たす為に口づけを繰り返す。

どれくらい過ぎたかわからない、でも気がつくと私は縁の腕を谷間と股に挟みながらキスをしていた。

滴る液体を自分の中で自覚する、きつと縁の手の平も濡れてしまったかもしれない。

多分縁にはまたばれてしまうけど別にいい。

縁はきつと何も感じていないだろうから。

あたしは開き直って先程までいやらしく繰り返していた行為を隠す事もせずに挟んだ縁の腕をさらに抱き、胸板を枕にして眠りについた。

「……………なんだ、寝たんだ」

星奈が夢中になってキスしていたので口をはさまずに寝ていた。

寝ているとたまに似たような事を繰り返しているが星奈のは動物のマーキングみたいなものなのか？

他人の気持ちを理解しきれていない縁は先程までの星奈を特に気にするでもなく胸板から降りて膝枕されている星奈の頭を撫でる。

ただしその表情は凡そ人が出来そうにない程に無感情で、無関心であり、瞳は硝子のビー玉をそのまま眼球にはめこんだのではないかと疑う程に何も映していなかった。

「あー、楽しかったあー!!」

夕方、帰りのリムジンの中で星奈は人の膝の上でまたゴロゴロと猫みたく唸っている。

「縁ーさくらんぼー」

「ほら、あーん」

「あーん」

人の指ごと口の中でもごもごとさせるんじゃないよ星奈

「次は部活で行く？もっと安いところないっばいあるし」

食べ終わると、意外な事に星奈から他人を誘おうとしていた。昔なら誘う相手すらいなかったっていうのにな。

「……縁、地味に失礼な事考えてるわね」

「んー……まあな、とりあえずいいんじゃないか？隣人部を誘っても」

「よしっ！決まり」

星奈は笑顔で俺の腕に絡み付く、さっきまでと違う楽しそうな笑顔を見て、頭を撫でながらプールでの星奈がイマイチ理解できない俺

だ
っ
た。

第二十話 プール その3 (後書き)

ラストのシメがな

何故こうなったのか……

感想待っています。

今更100件突破記念 昼休みの1コマ(前書き)

ホントに今更ですがお気に入り100件突破の御礼をかねて

今更100件突破記念 昼休みの1コマ

昼休み、俺は星奈と屋上で昼食を食べていた。

ちなみに星奈はお弁当、俺はクラスの女子からのお弁当。

クラスの何人からか貰ったのを星奈が凄いジト目で睨んでいた。
……っーか今も睨んでる。

「星奈……?」

「……………(むぐむぐ)」

ジト目がずっと変わらないな

「そんなに弁当足りなかったなら俺がもらっ」

ぶるんっ！ガスッ！！

……知らなかったよ、星奈はパンチに体の軸の他に胸の重心を使って拳を打ち込むんだな。

中心、右胸、左胸の三店アタック……『デルタパンチ』と名付けようか……

「……………ふん……………」

殴ってそっぽを向いてまた食べる、頬一杯に食べ物を入れてリスミたいになる。

「…………ぐすっ」

……涙目でいじけるなよ！むしろ涙目になりたいの俺だよ！？涙が
どうやって出るのか知らないけど。

「あー……星奈？なんか知らんけど……」じめん？」

「むぐむぐ……理由もなく謝らないでよ、しかも疑問形で」

いや、怒ってる意味わかんないし。

「じゃあ……」「(じくん)怒ってないから」……今俺に何して欲し
い？」

あ、星奈がぴくって動いた。

「…………(じー……)」

自分の弁当を眺めながら交互に俺と弁当を見つめる。

「…………(にやにや)(はっ……！(はっ……)(どやっ)(どやっ)」

いや、にやけ面が恥ずかしいからってどや顔されても。

「…………縁」

「ん？」

「…………たべさして」

「……は？」

「何して欲しいって言ったじゃない」

いや、言いましたけどもたべさして？

まさか同じ学年の田辺^{たへ}を刺してつて事か！？

「いやいやいやいやいやいやいや、星奈？星奈落ち着け？確かに田辺はやっちゃいけないことしたよ？でも刺せつてのはいかなものだろうか……？」

「田辺？ああ、あたしの体操服を持ち出した奴ね……あのゴミがどうかしたの？」

「うん、体操服を持ち出したのは犯罪だよ？天馬さんキレてたし、ステラさんとかが機関銃持ち出すくらいキレてたよ？でもファンクラブに釣鐘の刑をやられて十分反省したと思うんだよ俺は」

そう、田辺という男は何を血迷ったか星奈の体操着を盗み出した経緯がある。

星奈に頼まれて見つけたんだが、見つけた後が大変だった……

天馬さんはうちの叔父さんにまで連絡して叔父さんはアパッチまで導入し、柏崎家の敷地内にグリーンベレーが来たのには驚いた。

星奈のファンクラブも怒りに身を任せ哀に逝き哀に死ぬ勢いで彼を追い詰め、釣鐘や鋼鉄処女で彼を攻め抜いた。

……事態が収まる頃には田辺は完全に真人間になっていたもんなあ

……

まさか星奈はまだ許していなかったとは……

まさかあのにやけ面は彼を攻め抜く事を楽しんでいたのか！？なん

て女王様だ……！

「縁？凄い勘違いしてるみたいだけど違うから」

え、刺してもたれない刺すっつーか殺^さす？

「考えてるの違うわよ！？違うから！あんなゴミ虫以下にアタシが思考を使うわけないでしょうが！！縁がアタシに食べ物を食べさせてって意味よ！！」

「……………」

「『なーんだ、つまらん』みたいな顔止めてくれない？」

「……………いやあ、冗談を素で突っ込まれたらこんな表情になるっついてい
うか……………」

「そつち！？冗談をアタシが突っ込んだから冷めたの！？」

だってあの時にアパッチ呼んだのも拷問器具用意したのも俺だし

「はぁ……………とりあえずこれから昼休み終わるまでアタシに食べさせて、そうしたら許してあげるわ」

そう言っつて星奈は俺の隣で目を閉じて口を開ける。

俺は特に何も考えずに星奈の弁当からおかずを摘んで星奈の口に入れた。

「ん……………おいし」

顔をほころばせながら星奈は食べさせて貰っていた。

「（もぐもぐ）ところで縁、アタシの体操着姿ってどう？」

「んー、いいんじゃない？ラインが強調されてて。しかも天馬さんブルマ好きだからブルマで固定だしなー」

そう言うと星奈は少し頬を染めて俺の裾をつまむ。

「……部屋で着てあげよつか？この前ゲームに体操着にろーしょん？って言うの？あれでぬるぬるになりながらいちゃいちゃしてるシーンあったから、縁興味あるならアタシしてあげるわよ？」

普通男が土下座して頼み込むようなマニアックなプレイを誘う星奈に、最近真剣に柏崎家と家族会議をやった方がいいんじゃないかと思いはじめた。

今更100件突破記念 昼休みの1コマ（後書き）

100件突破の御礼がようやく出来ました。

本当は星奈に携帯を買わせたかったんですが、原作に携帯の話があったのでそちらに回します。

皆様これからもよろしく願いいたします。

クリスマス番外編 クリスマスがだいなしだよ!?(前書き)

お久しぶりです。

今日の設定は二人が付き合ったという設定で……

そして……限りなくアウトに近い表現を繰り返してみた。

クリスマス番外編 クリスマスがだいなしだよ!?

クリスマスの夜、星奈の家でクリスマスパーティーに参加した俺は、いつものように星奈の部屋でくつろいでいた。すると、星奈が急に妙な事を呟いた。

「……縁が女の子になってくれないかしら……」

「なんだそりゃ (コブラツイスト)」

「イダダダダダダ!!!ストップ!縁ストップ!!!」

コブラツイストを喰らいながら星奈を悲鳴をあげる。しかし星奈もただじゃ転ばない。

「サンタさん!サンタさん!アタシの願いを聞いて下さい!アタシは何もいらなから一日だけでいいから縁を爆乳お姉様にして!具体的には『ガチで私に恋しなさい』の『川上百花』お姉様みたいな感じのがいいです」

ガチで私に恋しなさいとは元がパソゲーで、今年アニメ化したガマルチエンディングを搭載したゲームだった為に個人的にはアニメが最初から最後までリアクション取りづらい評価の作品だ。

ちなみに星奈の言う川上百花というのは武道四天王の一人で『しまんとそふと』のキャラの中で最強と位置付けられる先輩キャラクタ―、巨乳の女の子好きで主人公を妹として溺愛するキャラである。

……どうやらゲームの説明をしている間に星奈が落ちた。
あれ？星奈が落ちたのを確認したら急に眠気が……

「こーら星奈、起きなきゃ悪戯しちゃうぞー」

アタシは聞き覚えの無い声を聞きながら体を揺すられる。

「縁……もうちょっと……」

シートを掴みながら縁が昨日いた場所、というよりも声のする場所に擦り寄りながら私は柔らかな感触の中で至福のひと時を過ごす。

「きゃん?! ちょっと星奈、ダメよもう」

この声の主が誰かわからない……そうだ、今日は縁とずっと一緒に居てもらおう。ゲームをして、アニメを見て……あわよくば……え、エッチな事をして可愛がって貰おう。

え、遠慮しないでいいわよね! アタシ達は恋人なんだし!!

えへへ……アタシはまたいっぱい触って貰って、お腹がタプタプになるまで出して貰うんだ。

「星奈、おっぱいが気持ちいいからお姉ちゃんうれしいけど、そろそろ止めなきゃムラムラとしちゃうぞー」

……お姉ちゃんって誰よ? アタシは今縁に触って貰うために擦りつけてるんだから。

「片方だけでもズツシリするな」

「スベスベしてるし柔らかくてモチモチで気持ちいいぞ」

「触ってるだけでグシヨグシヨだぞ星奈、ほら、お前一人で楽しんでないで……」

……………じゅるり

さあ、ご主……………縁！アタシは何時でも準備万端よ！朝からぬちよぬちよしてや「わひゃああ！？」

期待しながら待つていた私は背中から感じるむにゅむにゅした柔気持ちいい物体に頭を挟まれながら自分の胸をわしづかみにされた。

「星奈！お姉ちゃんを誘惑するイケナイ娘め！！お姉ちゃん負けてらんね」

「だ、誰よアンタ！？」

胸をわしづかみにされて頭を上に向けると、明らかに見覚えのない女がアタシを抱きしめていた。

川上百花お姉様みたいな容姿をした女はアタシが叫ぶと頬を膨らませて拗ねてしまうような顔をする。

……………か、可愛いじゃないの……………！

「縁お姉ちゃんに誰よってないんじゃない……………？」

「……………縁……………？」

よく知ってる名前の恋人がアタシにはいる……………。

「それでーっす 星奈が事が誰よりも大好きで、星奈の1番1番大

事な縁お姉ちゃんだよー」

「……………」

「あれ？なんか言ってくれないとお姉ちゃんいい加減泣いちゃうぞ？」

「お姉ちゃん…………？」

掠れたような声、アタシはパニック寸前でようやく絞り出せた声がこんなのだった。

「何かな、星奈？」

アタシの胸を揉み続けながら…………そして顔にキスしながら縁…………お姉ちゃん？はアタシと一緒に服を脱ぐ。

「……………あの」

「もう、星奈つたら！クリスマスは二人で居たいって言うからいっぱいいっぱいエッチな気分なのを我慢したんだよ？」

アタシの夢が叶った？え、リアル？リアルなの？

「お姉ちゃんはこの日を楽しみにしてたんだから……………」

アタシよりも全然大きな胸を弾ませながら下着を外す。くびれた腰が更に胸の大きさを強調し、叩いただけでぶるぶるとしそうなお尻からショーツがするつと脱げる。

「さ……、星奈」

前屈みになって胸の谷間を強調させ、片方の胸を自分で軽く舐める。アタシは気づいたら生まれたままの姿でフラフラと縁お姉ちゃんに近づく。

「おねーちゃんを め・し・あ・が・れ」

「メリイイイクリスマアアアアス!!!!!!!!!!!!!!」

アタシは全ての倫理を投げ出して飛び込んだ。

「うへへ……縁お姉ちゃん」

ベッドで自分の枕をペロペロと舐めながら星奈が全裸でクネクネと動いている。

………しよっじききもちわるいです………

女になってくれないかなーとか言うからどんな思いで言ったかと思えば、星奈がこれ以上ないくらいにエロい思考で煩惱を爆発させていた。

うん、趣味が変わっていらい加速度的に星奈が変態になりつつあるね。

「……………もう26日か」

気がつくと日付は12月26日……………こうして星奈と恋人になって初めてのクリスマスはかなり残念な結果に終わった。

「クンカクンカ、ペロペロ……………ZZZ」

クリスマス番外編 クリスマスがだいなしだよ!?(後書き)

さあ、皆さんと一緒に……

なんだこれは!?

ええ、ただ単に星奈が変態になっただけでした。
本編ではもっとまともにしてあげたいです、はい。

また近いうちに上げれるよう頑張って行きます。
理科やロリーズも出したいですから。

第二十一話 女子？そんなのいたか？（前書き）

年明け前に本編上げれて良かった……

今日はちょっとシリアスです。

第二十一話 女子？そんなのいたか？

昼休みが終わり、放課後、星奈と部室へ行く途中。

「縁、ブルマの何がダメなのよ？スパッツ？スパッツの方がいいの？」

昼休みの話がまだ続いているのが若干キツイが星奈の会話を無視しながら部室へ向かう。

「あ、もしかしてブルマだけ！もしくはスパッツだけとか！？でも上は下着つけないからローションで結構エロい感じになるわよ？牝ティーチャーで体操服にローションって結構エロかったわ！」

またエロゲーをやっている事に驚きは無いけど女子高生が昼間からエロゲトクってどうなんだろうね？

「っーか体操服はもういいって」

「あ、じゃあスクール水着？」

どうしてそうなるよ！？

「あ、競泳水着ね！！アマ神の八咲は可愛かったからな。……ブルンコからチラチラと競泳水着が見えて、ツンツンしながら話すのにデレると……くふふふ」

どうやら恋愛ゲームを思い出しているらしい、傍から見るとにやにやとしていて非常に気味が悪い……

ああ、ヨダレ出てるヨダレ。

ハンカチで星奈の口元を拭いていると反対側の廊下を全力疾走する金髪がいた。……………小鷹くんじゃね？

「なあ星奈、あれ……………」

「記録が伸び悩んで心配して見に行くアタシが不審者扱いされた時も驚いた顔しながらもアタシを庇ってくれて……………」

……………トリップが止まらなくなってるな……………まあ、小鷹くんが全力疾走しててもどうでもいいか。

なんか白衣来た女子を抱えてたけど、彼は何をやらかしたんだろうなあ……………。

俺はトリップして別次元の学園に行っている星奈を抱えながら教室へ戻った。

翌日、昨日小鷹くんが抱えていた眼鏡の女子が小鷹くんの教室へ行くのを見かけた。

「あれ？ねえ縁、今のって志熊理科じゃない？」

今回は星奈も気が付いたらしく、俺に確認をとる。

「？え？じゃああいつはあの毛はツラで本当はスキンヘッドなのか？」

「え？なんでスキンヘッド？」

星奈が怪訝そうに尋ねてくる。馬鹿だな星奈、って言ったらこの間クラスの男子がやっていたアクションゲーム『ロツカマンX』シリーズに出てくるラスボスの名前じゃないか。

スキンヘッドで、背がでかくて、いっつもラスボスのクセにステージのボスより簡単に倒せるって有名ならしいぜ？

……誰が言っただか知らないが。

「まあ…スキンヘッドは置いといて、その だっけ？なんで星奈は知ってるの？」

「いや、（ガンマ）じゃなくて……志熊ね。彼女は天才少女と呼ばれてるのよ。色々と特許を取っていて、学校に行かなくていくらい頭がいいらしいわよ？」

「……なんで学校にきてんの？」

頭いいなら飛び級でもして学校さっさと辞めりゃいいのに、毎日規則正しい生活で違和感無く箱詰めになれながら同じ事を三年もやらされるのをわざわざ経験してるなんて吐き気がするぜ？

……いや、義務教育含めたらもう九年はやってるか？……ヤバ、なんか鳥肌が。

「確かこっちから学園に来てくれってスカウトしたらしいわよ？何やったのかパパは教えてくれなかったけど……あ、そういえば『理

科室』っていう彼女専用の教室もあるらしわよ？いいわよねー、アタシと縁だけの教室って作ってくれないかしら」

ふーん、とりあえず星奈の父親が直接行っただな。

まあ、こつちから関わらなければ会うこともないだろ。

『フゴフゴ……フゴ……グフッ』

星奈の下では……男子……だよな？（クラスは知らん）恐らく男子らしき存在が星奈の椅子になって喜んでる。

「あ、ちよつと！アタシが縁と話してるんだから雑音入れないでよ」

『フオオー！』

怒られて悶える椅子にクラス全員が完全に馴染んでるのが凄いよな、皆順応しすぎだぜ？

「あのっ！真白先輩……！」

放課後、教室から出ようとすると女子に呼び止められた。

多分先輩呼びだから後輩だよな？俺が振り返ると、そこには部活焼けだろつか、少し肌の黒い活発そうな女子がいた。

「……縁に何か用」

星奈が俺の前に立ち、女子の壁になる。さっきまで部活に行こうと誘っていた星奈が、途端に機嫌が悪くなっている。

「柏崎先輩、私、真白先輩に用があつて」

星奈の噂なら後輩でも知っているんだろうが、彼女は気後れすることなく星奈と向き合う。

珍しいタイプだな、知り合いか？

「アタシが聞くわよ、縁に何の話かしら」

「あの……ごめんなさい、真白先輩に話があつて……」

クラスの中がいつの間にかここを中心に冷えてきている。……オイ星奈ファンクラブ、武器を構えるな武装解除しろ。

「星奈、俺に用があるみたいだから先行つてていいぞ？」

「ありがとうございます、真白先「駄目よ縁」……か、柏崎先輩！」

少し笑顔で返事を返す女子の言葉を遮るように星奈が振り返る。その目は不機嫌さや嫉妬、我が儘というのとは違っていた。

「……縁、アンタこの子を覚えてる（……）？」

相手を見る事無く問い掛ける星奈、多分この女子の事だろう。だから俺は素直に答えた。

「いや、初対面だろ？だから話を……」

続けようとする俺の手を強引に引き、星奈は教室を出た。

擦れ違いに見た女子の顔が随分と暗く、ショックを受けたような表情だったが、それを聞きたくても引つ張られていた俺はそのまま黙ってついて行くしか無かった。

「そのベンチに座って縁」

教室を出て部活へ行く途中でようやく足を止める星奈、さっきからずっと俯いていた星奈は俺にベンチに座るよう促すと、ようやく俺の顔を見た。いや、多分俺に向けて顔を上げたのだろう……少し寂しげな表情をしている。

「あの子はさ、いつもみたいに縁に告白しに来た女子よ……珍しくない話だけどさ、あの子はちょっと特別なのよ」

星奈が黙って俺を抱きしめる。いつもみたいなのではなく、ただ静かに胸に俺の顔を埋める。

「中学の時の体育祭でね、アンタに色々お世話になって、アンタに憧れてここに入った子らしいわよ。受験の面接でうっかり「憧れている先輩がいる」って言うっちゃうくらいアンタに憧れてるんですけど」

星奈は抱きしめる力を強め、押し出すように息を吐く。

「たまに見かけてはわざわざごつちに来て挨拶するような女の子なの、アタシが「なあ、星奈」……何、縁」

「女子ってなんの話だ？」

抱きしめて泣きそうな音を響かせる星奈に俺は確認する、星奈は少し黙っている。

どれくらいたったか解らなかったが、星奈は急に体を離してまた俺の手を引っ張った。

「なんでもないわよ！またアタシの縁にちよっかい出す女子がいたから「縁はアタシのよ！！」って言っただけ！」

そっいつてまた星奈は俺の腕に引っ付く。

星奈が言っていた女子が誰かは知らないが、自分から相談しに来た訳じゃないし大丈夫だろう。

俺は星奈をくつつけたまま部活へ向かった。

彼に憧れた少女はまだ彼の異常を知らない、故にまた彼女は彼を見つければ彼の元へ行く。

彼自身の思い出す事が無い泡沫の優しさに、一途に憧れて。

部室へ向かうと、扉の前からでもドタバタという音が聞こえる。所々聞こえる奇声は多分……夜空だろう。

「縁……アタシ今日ゲームの発売日だったわ」

踵を返す星奈の影に針を刺して引き止める。そして扉のドアノブに手をかける。

「影に針を刺してって何縁！ちょっと、無言は止めて！？てゆーかもう今日は帰りましょ？！ね！」

そんな星奈の訴えを無視してドアを開く。そこには……

「！！！！！！！！」

「まで夜空落ち着け！！うわっシャツの中に手を入れるな！」

「あにき、アイロンはわたくしが」

「小鷹先輩は細いのにしまってますねー理科的には涎が止まらないです」

どごその決戦兵器よろしく、初号機ばりの暴走で髪を振り上げる夜空と、半裸で眼鏡の白衣女子に絡まれる小鷹くん、そしてそこに群がる楠幸村と初対面の白衣女子がいた。

「あ、志熊理科」

「？」

「え……？」

星奈が白衣女子を指差すと、どうやらあっちも気が付いたらしくこ

第二十一話 女子？そんなのいたか？（後書き）

では皆さんよいお年を

第二十二話 割とカオスが日常茶飯事（前書き）

繋がり皆無なカオスな話……

いや、思い付きでぶち込むからこつなるんですね。

第二十二話 割とカオスが日常茶飯事

部室で久しぶりにマジ泣きしてる女子生徒の名前は 君、なんでも天才少女らしい。

「いや、マジ泣きしてるのはお前が原因だぞ縁」

小鷹くんからのツッコミをスルーして俺は天才少女 君に話し掛ける。

「それ以上近寄らないで下さい！」

俺が近付こうとすると泣いてた 君は小鷹くんの背中に隠れて威嚇してくる。

「……あれ？縁って年下に嫌われやすい……？」

威嚇される俺を見ながら星奈はいきなり失礼な事を言いやがる。いつ俺が年下に嫌われたよ。

「アツハツハツハツ！！気にするな縁、この白衣女子はもう部室を出て行くのだからな！」

さっきまで髪を振り回していた初号機夜空は今度はマッドサイエンティストみたいな妙なテンションになっている。

「に、入部希望を理科は出した筈ですが……！」

「ああ出したな、だが入部テストは真白縁との一騎打ちで勝利する

ことだ、ジャンルは問わんが会ってすぐ泣き出した貴様に勝利する事が出来るかな？」

なんということでしょう。俺はいつの間にか入部テストの試験官になっていたので。

「待った！縁はまだ仮入部よね？」

「そうだ、つまり仮入部部員を倒さねば部員入りは出来んということだ」

凄いいルール押し付けてきたな。

「待った夜空、勝つ負ける云々よりまずコイツが縁を怖がる理由を聞こう！な？」

「そう言われてもなー、俺 君？とは初対面だぜ？」

「……………は？」

会った記憶が無いから初対面だって言っただけなのに 君？は目を見開いて凄いい怖い顔をしてきた。「何いつてんのコイツ」みたいな表情で。

「えっと……………え、縁とはいつ会ったの？」

「去年の秋です」

星奈が腫れ物に触れるかのように威嚇する 君に尋ねる。 君は俺以外には割と普通に接している……………がつてむ。

ショックを受けたフリをしていじけていると、星奈がちょこんと隣に座る。俺はそのまま星奈の肩に頭を乗せて寄り掛かっていると、君がジト目で見てくる。

「……隣人部って友達作りの部活なのになんで自然にいちやつくんですか？意味不明です」

「や、まあ、あの二人はほっとけ。で、去年の秋に縁と何があったんだ？」

「……あれは忘れもしない去年の秋、理科は受験せずは何処でも行けるということもあって、自分の研究室でいつでもどつり実験をしていました……」

【簡単回想 音声のみ】

「お邪魔しまーす！」

「なんですか急に、理科の実験の邪魔なんですけど」

「ここがお前の部屋ならな。はい、出てって出てって」

「なんでですか！ここ理科の部屋」もう違うよー」「…は？」

「ほら、お前の研究室は実験器具から隠してる同人誌まで全て俺のものだ」

「な！？こ、こんな契約書は無効です無効！」

「ふふん、好きなだけ足掻いてみる天才少女」

【一週間後】

「ど、どうして……！」

「まあ、これが力の差というやつだ」

「か、返して下さいよ理科の部屋……ぐす」

「返して欲しくはこの学園に入学しろ」

「ひっく……ぐす……ぐすっ……うん……はい」

【回想終了】

「」「最ッ低だなお前……」「」

なんということでしょう。楠幸村まで同じセリフで返してきやがった。

「このやり方じゃパパも言えないわよね……」

流石に星奈も頬を引き攣らせているが、俺が自分からくっついてるのが珍しいのか、目がにやけたままだ。

「ぐすっ……そういう事で理科の研究室を返して下さい」

「だが断る」

あ、泣きだした。そして皆の目が怖い。

なんか（ - - 11 ）みたいな顔したくなる。

「待って、言っただろう？覚えてないって、契約書も俺どこにあるか知らないし」

素直にカミングアウトすると、君が一層泣きそうな顔をしてきた、めんどくさくなってきたから消えようとする、星奈が珍しく怒りマークを頭に付けていた。

「縁……」

「……はい」

「今回は縁が悪いから、ちゃんと返してあげなさい」

「……はい、わかりました」

異様な圧力で俺に命令する星奈に俺は久しぶりに逆らえず、シユンとしてしまった。

「シユンとした真白先輩を慰めに来ました!!」

「それはアタシの特権よ！っていつかさっき（前話）手酷い扱いを受けたばかりで何その格好!!？」

窓から入って来た女子に全力でツッコミを入れる星奈、つーか窓から来た女子の格好の意味が解らない。

顔を仮面で隠し、シルクハットを被ったスクール水着の女子生徒……もう既に何かに目覚めてるだろコイツ。

「というか何があったの!? 何があったらそんな格好になるの!?
『ちよっとおとなしめで縁に憧れてる後輩』って設定がだいなしよ
!?!?」

「憧れの先輩の前じゃはっちゃけた方がいいって思ったんです!」
星奈が女子に語りかける、どうやら知り合いらしいんだが、たまに出て来る俺の名前で俺まで変態扱いされそうだ。

「と、とりあえず寒いだろうし、変な噂が立つから部室に入ってくれ!」

小鷹くんが一応スク水仮面を中に入れようと肩を掴んだ。

「いや、駄目だろ部室に入れるな!」

そう言おうとする夜空、しかしこのカオスな状況で更に信じられない事が起きた。

「いやあああああ! おとこ……!?!?!」

「グハア!?!?!」

「こたか……!?!?!」 「あにき……!?!?!」

なんと小鷹くんがボディブローを喰らって宙に浮いてしまった、しかも 君を巻き込んで。

「貴様！何をしにきた！！」

当然怒りだす夜空にスク水仮面は肩を震わして答える。

「だ、だって男の人に捕まれて何かされるかもと思ったら……」

泣きそうな声で震えるスク水仮面を見て、若干夜空もバツが悪くなり視線をそらす。すると星奈が思い出したように

「あ、そういえば男性恐怖症だっけ？確か男が触ると問答無用で殴るとかって噂縁から聞いたわね」

とか言い出したので夜空のヘッドロックの餌食になってしまった。

「痛い痛い痛い！！肋骨が！アバラが！アタシの頭に当たってる夜空！！」

「そんなに小さくない！最近BからCになったんだ！！」

二年女子で不毛な争いを続けていると、端っでは何処からか持ち出した木刀でスク水仮面に切り掛かる楠幸村……

「あにきのかたきを、とらせていただきます」

「いやああ！！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！」

「あの……」

完全に混沌としているこの状況で流石の天才少女も頭が追いつかないらしい。

「か小鷹くん巻き込まれて小鷹くんが 君を襲うように倒れてしまってる。」

「ああ、研究室な？とりあえず何とかしとくから」

「あ、はい。あと理科は最初は小鷹先輩といたくて入部しに来たんですが……」

小鷹くんは変わり者に好かれやすいのか？なんかフラグがかなりある気がするけど。

「あー、割とこのカオスが日常茶飯事だから巻き込まれるの嫌なら……」

「逆です！ここにいたらドロドロの人間関係が見れそうなので理科絶対に入ります！！」

よくわからない動機で 君が入部してきた。

「あ、真白先輩？理科は じゃなくて志熊ですから、間違えないで下さいね」

ウィンクして決めつつもりなんだろうが気絶した小鷹くんを押し倒されてハアハアしてるから色々だいなしだよ天才少女。

第二十二話 割とカオスが日常茶飯事（後書き）

隣人部って外から人が来ないから面白いと思うんですが、あえて単発で意味の解らないキャラを出してみたくなる不思議……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7699u/>

こいつに友達がいらないのはもったいない

2012年1月4日06時46分発行